

一谷嫩軍記

第一

戰克の將云々
大將は國の輔弼

京の君一義經の
奥方

念ふ一難作も
なく

序詞 戰克の將は國の爪牙、犬馬の人を勞則帷蓋を以て是を覆ふ、況大功の人においてをや、重ぜずんば有べからずと、漢書に見へしも宜なるかな。九郎判官義經兄の下知に依つて、奢る平家を討亡し、朝家をやすんじ奉らんと、軍慮をうながす堀川御所、日夜に評議區々なる。いで其頃は壽永三年二月半、京の君の御父平大納言時忠、密に須磨の皇居より入來を、儲の上座にすよめ、義先以て遠路の所御苦勞千万」と挨拶あれば、時さればく、様々術を以て、神璽と八咫の鏡は念ふ奪ひおふせしが、十握の御劔は安徳天皇、晝夜隨身ましますば思ふに任せず、先二色の神寶受取給へ」とありければ、謹んで頂拜有、「コハ、忝き御念志。是偏に舅君の御働き」と、悦喜の詞に時忠重ねて、「扱又平家の要害、嶮岨を頼みの地理陣取、中々容易の事にあらず、則繪圖に記せ

のつしりと一重
みありて

り」と取出し手に渡せば、逐一細見有所へ、「五條の三位俊成卿よりのお使者、只今是へ御出」と、取次聲や長袖の、花の香名のみ菊の前、裾姿のつしりとたばひ頃なる白菊の、露をおびたるごとくにて、おめす臆せず打通り、大將の御座近くしとやかに手をつかへ、「わらはと五條三位が娘菊の前と申者。父俊成は禁裏にて、千載集の役、折から旅人とおほしき者、此歌を集に加へて給はれと一向の願ひ、見れば天晴秀逸と感じながらも、私に加へん事もさだかならず、御伺ひの爲参上」と、入る事計詞數いはぬ色なる戀人の、短冊御前に指置くも、忍しやくこぼるゝ風情なり。義經も忠度の詠歌としれどさあらぬ體、手に取て吟じらる。歌「さど波や志賀の都はあれにしを、昔ながらの山櫻かな」「ハレ香ばしやあてやかや。何かは苦しかるべき」と、賞美の詞を時忠打けし、「ヤア其歌集には入られまじ。罷ならぬ」と傍若無人、さよゆる詞を菊の前、「イヤ申時忠様、お聞の通りあの歌は、父俊成も感心し、君も御賞美ましますを、集に入なとおつしやるは、誤りばし有ての事か。憚ながら今一度吟じかへして御評議有」と、いひも切せず時「ヤア愚々。ソレ其歌は薩摩守忠度、白髭明神社參の時、志賀にて詠みしは犬打童も知る所。元より忠度は俊成が門家、弟子ひいきに平家へ近寄、後ぐらき此使、追かへされよ」と

いひはぐすーい
ひこなす

いひはぐせば、菊の前詰寄つて、「イヤ申弟子を眞眞に平家へ心寄るとは大切なるお詞、
それには慥な」時「ホ、證據といふは其方と薩摩守、兼てより様子有事知つてゐる。其縁
に俊成が平家をかばふ所存といふが、某が誤りか」と、我も平家で有ながら、前後揃は
ぬ詞たゝかひ、義經「暫し」ととどめ給ひ、「平家方に縁有と、一旦不審立上は俊成卿迄
越度となり、集に入事かたかるべし。去ながら所存あれば此短冊、義經が預り兎も角もは
からはん。此趣を傳へられよ」と、始終を遺良將の、風雅の返答尤と、時忠詞を
控ゆれば、力及ばず菊の前猶も摺寄手をつかへ、「父俊成も此秀歌惜む心に候へば、跡よ
りよきに御差圖」と、思ひ定めし言の葉も、花に嵐の時忠に、心残してお暇申五條の
館へ立歸る。お次の方より、「武藏國の住人、岡部の六彌太忠澄、熊谷次郎直實參上」と、
披露を待す立出て、六彌太御前に手をつかへ、「頼朝公より御墨付到來」と指出し、「西國
の軍、數日延引に付再三の御催促。一日も早く御出陣」と、諫と俱に次郎直實、「君御存し
られずや。鎌倉には佞臣おほく、義經は平大納言時忠の娘、京の君に御心を寄られ、亡
慮のかまへなにと頼朝公に讒言申族も有と承り候へば、時移るは悪かりなん、急
ぎ御出馬然るべし」と、詞を揃申ける。大將莞爾と打笑給ひ、「ホ、兩人が諫尤なが

謀を帷幕の云々
—史記漢皇本紀
の句

さへ給ふな—か
け給ふな

ら、謀を帷幕の内にめぐらし、勝事を千里の外に顯はすこそ始終の勝利たるべき也。義經發向遲なはるは、安徳天皇所持し給ふ三種の寶、都へ返すを妬く思ひ、唐土天竺へも渡すか、若海底のみくすとならば、寶祚の傳へます、日の本はくらやみ、とやせんかくやと心をいため、是におはする平大納言時忠は、心懦弱なる御方なれば騙つて縁者と成、頼むより早かけ入て是見よ、神璽内侍所は御手に入、寶劔は安徳帝、御身を離させ給はねば、術を以て奪ひかへさん。要害厳しき平家の備へ、繪圖に畫せて案内をしる、見よく方々嶮岨を頼みの油斷を見合せ、嶋越より眞下り、逆落しに攻入ば、あはてふためく平家の一類、討取は手裏に有」と、智仁勇備の良將の、軍慮を聞て諸大名、はつと感ずる計也。「ノウ時忠卿、一旦縁を組し上は別心なき婚舅、天下の爲の謀御心にさへ給ふな」と、忿をなだむる頼智の詞、時忠は默然と指俯いて居たりける。義經重ねて、「ヤア誰か有用意の制札」「はつ」と答へて高札さよけ、御前に指置けば、すつと立て床の間の、筒に生けたる薄櫻に、件の短冊結び付、「いかに兩人、今度の軍は勅詔の一戰、私の趣意にあらず。六彌太は薩摩守忠度の陣へ向ひ、御願ひの此御詠歌千載集には入しか共、勅勘の御身なれば、名を顯はすを憚りて讀人しれずと記されし趣を演

此花江南の所無
—江南の所無は
梅の一名なるを
標にしたり一枝
を敦盛に一指を
一子小次郎に當
つる事後にあり
此高札今猶須磨
寺にあり其文は
此花江南所無也
一枝於折盜之輩
者任天永紅葉之
例伐一枝者可剪
一指(南畝琴言)
二月日(南畝琴言)
かう——神々
し

説し、集に入たる其印、此短冊を結びたる山櫻を送るべし。又熊谷は搦手の、經盛敦盛固めたる、須磨の陣所へ打向ひ、若木の櫻を汝が陣屋、義經花に心をこめ、武藏坊辨慶に筆を取せし高札、此花江南所無也、一枝折盜の輩において、天永紅葉の例に任せ、一枝を伐らば一指を剪るべし。此禁制の心をさとし、若木の櫻を守護せん者、熊谷ならで外になし。其旨屹度心得よ」と、高札は直實、歌は岡部に給ひければ、「はつ」と兩人傾掌し心を含む禁札の、外を和ぐ和歌の道、花をいたはる大將に、實有色有情有、恥有時忠詞なく、ふせうぐに立上れば、二人の勇士も退出の、底の底意を堀川や、深き恵を汲分けて、祝ひことぶく三重御代の春、柳櫻や松梅も、皆御慈愛に生茂り、北野の社かうくと、木の間くに打幕の、内は男女の色はへて都ぞ春の錦なり。九郎義經の御臺京の君、幕しほらせて出給へば、跡に付々娼共、一申々姫君様、いつにないそはくと何を御覽遊ばす」と、尋られて、斯さればいのふ、義經様は此社へ毎日の御詣で、則けふが満する日と、けさ程より御參詣、お道迎ひの心にて思ひ立た此遊山、木々の花より紅葉より早ふお顔が見たさに」と、夫婦に成つても惚てゐる、心は詞に出にけり。「腰元共も氣をのほし、「うはのそらめかあれくく、社の方より深編笠、立派な若衆供に連、當

わやく―冗戯
 たんのう―満足
 しは―愛嬌
 だくぼく―どき
 どき

世風のやさ姿、お姫様御らうじやれ。ようにたじやないかいな」と、いふ間程なく九郎義經天満神へ日參に、けふ百日の満願も、人目を忍ぶ深編笠、熊谷の小次郎を供の丁稚に引連れて、しづかに下向ましまして、京の君出向ひ、「けさとく參詣遊ばして、今比の御下向は、定て道に面白い、お心寄が有たである。さすられなされた此肌を、改めたい」と引寄せて、ふと股ふつより、義「アイタ、ゝゝ」姫「何がいたいへ、ま一つ」と、つめつた跡の紫は、ゆかしの色と見へにける。義經も御機嫌よく、「イヤ是はめいわく。けふは遊山と聞し故、大内は色所嫁入ぬ先に結ばれた、よしみの人にもお出合かと、遠慮で態と遅うきた」と、もたせ詞に姫君は、顔打赤め「コレ申、そんなさもししい濡衣の疑受る覺へはない。わやくな事を」と計にて、おろく涙に腰元共、「こりや殿様の皆御無理。何ほ程隠しても、新枕が證據人、たいそに有たかなかつたかお心に覺がある。アレく申お姫様の癩が上つた、療治して上なされ、何ぞでたんのうなされたら、虫が下ろ」とむりやりに、押やるもしほ行もしほ、「小次郎來れ」と打連れて、幕の内にぞ入給ふ。己が心のだくぼくに、人を埋めて平山の武者所、荷擔の人と出合の約束。かたへに打ち幕の紋、目覺のめうが巴、あほうな事を企てよ、我身をしらぬ平時忠、跡に續いて梶原

ふか〜うか

平次、幕より立出小手招ぎ、一つ所へ寄りつどひ、武者所時忠に打向ひ、「先達て景高を以て御願ひ申上たる、彼經盛へ遣はされし玉折姫、呼戻して某が妻にせよとの御事、則今日此所で婿舅の結の盃、外に御相談の義も有と景高の内意によつて、是迄推參仕る」と、挨拶すれば打領き、時「ホ、貴殿を婿に取ば、此時忠も大慶。其子細は、義經が邪智にほこり、三種の神器を奪はん爲京の君を望みしを、何心なく縁を組、神寶をふか〜と渡したる今の後悔、義經は末々迄我と同意の者にあらず。何とぞ姫を取かへし是なる平次景高、相婿二人都の守護に据へおかば、禁廷は我心の儘、此上もなき悦び」と、いふに平次はしやり出、「ノウ武者所、貴殿も我も娘達を女房に貰ふて有ながら、京の君は義經が館に居らるゝ、玉折姫は經盛が西國へ連下れば、兩方ながらおも長な談合」平「サア其事を此平山も、いろ〜工夫してゐる」と、案じに時忠打笑ひ、「ハ、アいや其義は何より安い事。經盛と某頃日不中に成たれば、娘を戻せと云ひやらば、縁切つて戻すは治定。又京の君が事は、コレかう〜」と叫べば、平次聞よりぞく〜踊り、「ハハア奪取とはおちろ〜。幸けふも此所へ參詣と聞し間、首尾を窺ひ奪ひ捕らん。扱此上は義經を亡す術が肝要〜。幕の内にて熟談申さん、いざ」と三人立上り、景「サア

水の月云々―目に見えて手に取られぬ隙

平山殿お出なされ」平「アいや／＼貴様は姉婿マアお出」景「イヤ先舅殿から御入あれ」と、
 俄に舅婿呼はり、水の月取る猿松共、伴ひてこそ入にけれ。こなたの幕より小次郎は、
 勢ひ込んでかけ出すを、「待」と一聲かけながら義經立出、「ヤア／＼小次郎、けしからぬ
 勢ひにていづくへ行や」と宣へば、小君しろしめされずや、此前にて三人が最前よりの
 相談。末々君の仇するやつばらかたつぱし打殺し、禍の根をはらはん」と又かけ行を、
 義「ヤレ早まるな」と引とどめ、「汝より義經が始終の様子は知つたれ共、軍を出さぬ其内
 に、一人でも味方の勢討取は不吉く。又某を亡さんと彼等がいかが程もがいても、燈
 心で磐石及ばぬ事、構はず共捨置け」と、さも大様に宣ふ中、幕の女中聲々に、「のふ悲
 しや京の君様御自害遊した」と、さけぶに義經小次郎も驚きさわぎかけ付れば、御いた
 はしや京の君劔にふして事切給ひ、枕に残る一通有、こはいぶかしと押ひらき見給へば、
 筆のはこびも定まらず、讀むも哀の文のあや、「誠に御館へ入しより幾千代迄も末か
 けて、御情を受參らせんと悦びも仇夢となる、我親の悪心と見るより心附々にも、聞へ
 を憚りとく／＼」とくり返し讀終り、義「ヘツエ是非もなし。親の惡事に心をくるしめ、世
 を見限りしか殘念や。死なず共濟むべきに、遺女の細き心、傍に居ながら別れにも我

手ぐすね—まぢ
かまへる

うづ虫—蛆虫

身を恥て詞さへ、かはさず果した不便やな。みじかき契りで有しよ」と、やゝ御涙にくれ給へば、悲しさ増る腰元共、血氣にはやる小次郎も、俱に涙にくれ居たる。暫く有つて御大將、急度思案をめぐらし給ひ、「小次郎こよ」と耳に口、コレナかうくとつどくに言含め、「よくはからへ」と計にて、編笠に人目を忍び、館に歸らせ給ひける。直家は指心得邊を見廻し、「京の君の御立也」と高聲に呼はれば、かたへの幕には平山梶原、「スハよき首尾」と夕暮時、頬かぶりに顔かくし、けらいに呷き領き合、手ぐすね引いて待所へ、腰元婢付随ひ、御乗物を先に立、小次郎跡に引添ふて、歩來るを見るよりも、爰かしこよりむらくと走寄て乗物を、奪ひ捕んとおつ取まく。小次郎すかさず身がまへし、「ヤア慮外なるうづ虫めら。忝くも義經公の御臺京の君の御乗物。狼藉を働いて後悔すな」ときめ付る。「チ、サ、京の君知つてゐる。四の五のなしに渡さぬと、其前髪首さらへ落す」と罵れば、小次郎はたまり兼ねぬいて切かゝるを、こなたも拔連渡り合、切結ぶ太刀かけに、女中は残らず逃ちつて、直家一人、多勢を相手、受つ流して戦へ共、追小腕の言甲斐なく、やうく其場を切ぬけて、乗物捨置逃歸る。「サアもふよいは長追すな。いでまあ早ふ戀人のお顔を見ん」と平次景高、乗物の戸を明て、斯と見

のべー述べと野邊
古郷を云々降るに
かく經盛の歌に古郷を燒野が原とかへり見て末は煙の浪路をぞ行く落汐一引き汐もつにかく

るより悔りし、景「ア、こりや死んでゐるは」「ヤアくやあ」と時忠も、平山諸共指覗き、驚く中にも時忠は、「添たる一通こりや何じや」と、ひらき見るより又仰天、「ヤア扱は最前から相談した、様子を知つての自害と見へた。ハッはつ」と計さしうつむき、途方にくれて居たりける。景高はくつたく顔、「エ、埒もない、是はまあどうせうぞいのふ平山殿」平「サアどうといふたらどうせうぞい」景「申時忠卿御思案はござりませぬか」時「ハテ思案といふてどうせうぞい。得心で死んだればねだりにもやられまいし、此儘で葬禮せう。婚の役に景高、供をして焼香めされ」景「ハイ。いやこれ末重殿も相婿、葬に立ずんや居られまい。サアくござれ」と誘れて、平山は不請ぐの佛頂面、時忠は涙ながら、「平山景高遠路墓所迄御出御苦勞千萬」と、禮狀文句を口上で、のべの送の營みと、打つれてこそ三重露時雨、古郷をやけ野が原と見返りて、修理大夫經盛卿一門の人々と、俱に都を落汐の搦手をかためんと、福原にとどまりて、手配何や萱の御所、しばし假居の事しけき、中に養子の玉折姫、軍の事も色事も繪で見た計味しらぬ、行儀育の器量よし、女房達と諸共に、浮世咄の跡や先、越中次郎兵衛盛次が妻の裏葉、ひそく聲にて、「申皆様、此圖のない先から姫君と敦盛様、許嫁計で御祝言の遅いのは、どふした事」と

おぼこー未通女

ちよびくさー少しは

いかつがましく
いかめしく

尋れば、忠清が妻の櫛の尾、「サアじたい御姫様がおほこで、しかけを待てござる故、いつ迄も埒が明ぬ。ちよびくさ咄しもしかけたり、人のない間にお傍へ寄つてつめつても見たり、御祝言のない先に、内證の祝言は濟様にせにや、姫ごぜは立物じやないわいな」と、なぶれば姫は眞請にして、「ほんにとうから、そうしたら、つる夫婦になられう物。それしらなんだそしてまあ、寢てから何といはふや」と、袖打おほふ其風情、葉の裏に咲玉椿、色を含みてかはゆらし。取次の侍罷り出、「時忠卿よりのお使者、大館立番殿御出」と、知らする聲に女房達、「ナウ申お姫様、お里の便殿様へ申上ん」と三人は、打連てこそ入にけれ。参議平の經盛卿、時忠の使と聞一家ながら不平の中、いかなる事か云送ると、御臺諸共立出給ひ、しづくと座に直り、「時忠卿の御使者、是へ通せ」と仰の内、頼も形も大館立番いかつがましく畏り、「主人時忠申越候は、先達て其元へ遣はし置く玉折姫、いまだ敦盛殿と祝言も御座なき事、是以て互の幸、存する旨候へば御戻し下されよと主人が口上。則迎ひの乗物も、ようる致し参つたり。早く姫をお渡し有」と、さも横柄にのべにける。經盛卿の詞を待す、みだい所藤の方姫君に打向ひ、「ナウ玉折、親御から迎ひにきたがいぬる氣が、いにともないか。そなたの心次第ぞ」と、

身は身て云々―
獨り身は矢張獨
り身

尋給へど姫君は、何と返答いは枕、胸もふさがる思ひにて指脩いて詞なし。御臺「ホ、返

事のないはいにたい氣じやの。ア、あぢきないは人心、ちいさい時からいつくしみ、手

しほにかけ育てても、身は身で通るといふが誠。暮かよる平家を捨て、日の出の源氏に組

し給ふ、親御に随分孝行仕や」と、涙交りの恨の詞、經盛卿打消して、「ハテくどくと

何を諄。源平と引別れ、互に心よからぬ中、娘を戻せと有こそ幸。コレく玄番、お

使者の趣承知致し、則娘を返し申すと、立歸つて達すべし。其方迎に参りし上は、

此方より人に及ばず、早く姫を連歸れ」と、仰にはつと大館玄番、玉折姫の傍に寄、「ナウ姫

君何をうちく、隙入給ふ。時忠のお心は呼戻すと其儘嫁入の御相談。コレお悦びなされ、

其婚殿といふは、平山の武者所未重とて源氏の兵、姉婚の義經殿と肩をならべる大名。

あやかり者とはお前の事。サアく早ふ乗物に、お乗なされ」と立寄る中、姫はとかうの

答なく、ずつと寄て玄番が刀、抜手も見せず切付れば、肩先ずつばと切込れ、是はと寄る

を又一太刀、うんとものつけに倒るゝを、飛かよつてとどめの刀、さしもの經盛仰天に、藤

の方は走寄、「チ、玉折、れきくの武士も及ばぬ手際心の健氣。サアくこちへ」と誘

ひて、「女心のはしたなう、いふて今さら恥かしい。其心を見る上は、ナウ申」經「チ、

はしたなう―不
謹慎に

いもが子の云々
—妹が子にはふ
程にこそなりけ
りてやしなひに
せよの歌

成程」と御夫婦は、點頭き合ふて藤の方、「コレ玉折、そなたに見せる事が有、待て居や」と云捨て一間に入給ふ。無官の太夫敦盛は父と一所に出陣の、用意取々なる中に、母のしらせに奥の間より、「御用いかに」と出給へば、跡よりみだいな房達、銚子土器携へて、「君は千代ませ婚君は、三國一」と祝しける。様子しらねば敦盛は、悔りうろくあたりをながめおはすれば、經盛は取あへず、「ナウ敦盛卿、玉折姫と婚儀の結び、其盃を取上られ姫へさして壽を」と、聞より染衣打笑ひ、「申殿様、御祝言の盃は、姫ごぜより飲初めて、夫へさすが世上のならひ、思召忘れの様に存ます。ホ、ホ、」と袖覆へば、經盛卿打點頭せ給ひ、「ホ、女房の盃を夫へさし、壽を祝ふ下つかたの婚禮は其通り。譯をしらねば不審は尤幸の折柄なれば語り聞す事有」と、云つと立て敦盛の、御手を取上座に直し、其身は次に座を改め、「口外へ出さねば知人有まじ。そも此敦盛卿は、我子にて我子にあらず。元此みだいな藤の方は、法皇に宮仕へ、御寵愛ふかうして、御胤を身にやどせしが、人の妬の強ければと、先祖平の忠盛へ、白河院より下されし祇園女御の例に任せ、懐胎の身を其儘、某が宿の妻に給はりて出生有し此敦盛、我子として育しが、院參の折ごとに、人なき間にはいもが子の、歌によそへて御尋、淺からぬ

菊のしたどり
聞くにかけて雨
陽縣の菊水齡を
延ぶ故事をひく

涙云々なしと
涙の玉にかく

御いづくし。かく由緒有敦盛なれば、いかなる高位高官も、望の如く成るべけれ共、
官位を受ては臣下の列、重て帝位をふむ事叶はず。かく御寵愛ふかき敦盛、まさかの時
は春宮にも立給はん御心やと、叡慮をはかり今日迄態と官位の望もせず、扱こそ無官の
太夫と呼ばせしぞや。斯物語る上からは、其土器は天盃同然、流を汲んで玉折姫、三々
九度を納むべし」と、仰を菊のしたどりに、千代を結の番蝶、祝ひ納る姫君の、心の内
の嬉しさは、早う其日の暮したからん。經盛詞を改めて、「敦盛卿へ願ひ有。都騒動の折
柄、法皇御幸の御行方は知れず、御身を殘しとどめても、襲來る源氏の軍兵、うめきや見
せ奉らんかと、心ならず一門と、諸共是迄伴ひ申せし事、嘸や跡にて法皇の叡慮くるし
め給はん勿體なや。其上今度の合戦は、必定平家滅亡にて、一門殘らず討死せば、都へ
伴ひ申人も有まじ。御身は是より藤の方と、玉折姫を具し給ひ、都はいまだ騒しからん、
暫く北嵯峨へ御入有、折を見合せ法皇の御殿へ移り給ふべし。今生の對面も今日限の經
盛、暇乞に御顔ばせ見せもし見もしなされよ」と、涙にくれて宣へば、みだいかうの
詞も涙、玉折姫女房達、驚く計うつとりと、顔見合せて居たりけり。敦盛大きに恐入、
「コハ存寄ぬ父の仰、生れぬ先から親子と成、けふ迄御恩を受し事、須彌蒼海も競たら

す。譬たとへいづれの胤たねにもせよ、後の親おやこそ親ならめ。東西とうざい覺さへて今日迄、御意ごいを背そむし事な
けれど、是計おゆるしは御免有、一所いつしよに出陣しゅつちん仕り、御馬おんうまの先さきにて潔いさぎよう御恩ごおんを送らせ給はれ」と、
涙なみだにくれての御願ごがんひ。經盛つねもり卿きやう押おしかへし、「一旦たんの義心ぎしん尤もつなれ共、親おやの恩おんと天子の御恩ごおん一つ
に云いふも恐有、是非ぜひ御承引ごしやういんなきならば、法皇ほうわうへの申譯まうしわけ、某それがしは切腹せつぷくと面色めんしよくかはれば敦
盛もりきやう卿、「ハ、ア誤あやまり入いり奉まつる。此上おほせは仰したがひに隨したがひ兎も角も仕らん」經きやうム、都みやこへ歸り給はんと
な。ホ、承引しやういん有あつて嬉うれしやく。源氏げんじの勢せいは丹波路たんはぢと津つの國くにの街道かいだうより、二手ふたてによする
と聞き及およぶ。敵てきの見ぬめの浦傳うらづたひ、難波なには大江おほえの岸かしを越こへ、河内路かはちぢより登給のぼりたまへ。早はやふく」畏
て敦盛あつもりは、「用意ようい」と一間ひつまへ入給いりたまへば、經きやうソレ藤ふぢの方玉折かたたまをりも、旅たびの支度しどを急いそれよ。ヤアコ
リヤく染衣そめぎぬ、皆みなの者取賄とりまかひにいけく」と、仰おほせにみだいは、「サアおじや」と、皆引連ひきつれて
入給いりたまふ。經盛つねもり悦喜えき限りなく、「サア心安こころやすし是からは、一の谷たにへ馳向はせむかひ、持口もちぐちを固もちめん」と、獨
言ごごしておはする所へ、内府宗盛ないふ ねもりの使つかひとして、雜兵ざふひ一人馳來やういちにんはせきたり、「經盛つねもり卿きやうへ火急くわきふの御用ごよう」と、
一通つうを指さし出いだせば、何事なにやらんと押おしひらき、何々なに三さんくさの合戰かせん味方敗北かたはひばく、是こゝに依よつて主上しゅじやうを
始はじめ門院もんいん二位殿密にに讃岐八島さぬき やしまの浦うらへおひらき有、貴殿御船きでんみふねを守護しゆごとの仰おほせによつて、迎むかひ
の兵船指遣ひやうせんさしつかはす、急いそぎ出立有しゅつたつあるべき由、讀よみも終おはらず心せき立、經きやう「サア事急きふなり猶豫いうよなら

かた糸―かたしにかく

同じ毛云々―同じ緋威の兜に鐵形打つたり

母衣―鎧の後部につけて矢を防ぐもの

ず。かねて妻子に別れは告ぐる、再び逢ふも互の輪廻、此儘に出行ん案内せよ」と使を引連れ、急ぎ濱邊に出給ふ。かくとはしらず藤の方、けふ別れてはいつか又、逢見ん事はかた糸の、結馴れにし夫婦の縁、せめて名残を惜まんと、座敷をそつと立出て、「經盛卿、我つまと、尋給へど面影は、見ぬ限々を爰かしこ、見廻す中に落ちたる一通、ひらき見るより胸りし、「コレく皆の衆早ふく。殿は出陣なされたはいの」と、呼はり給ふ御聲に、玉折姫女房達、追々に走り出で一つ所に寄集り、互に顔を見合せて、呆れ果たる計なり。かゝる折節奥庭より、間近く聞ゆる轡の音、何事やらんと見る所に、江戸敦盛其日の出立には、雛鶴縫ふたる直垂に、鎧は緋威同じ毛の、鍬形打ちたる兜を著て、廿四さいたる染羽の矢、重藤の弓を持ち、いさみすゝんで乗出し給へば、玉折見るより帶引きしめ、小づまかい取かひぐしく、なけしにかけたる長刀追取、「母様さらば」と庭に飛びおり、轡面に引添ふたり。みだいは驚き、「ヤアく敦盛、都へ登れと父の仰、其出立は心得ず」と、尋給へば、敦「おろかや母上、父の命に従ふは一旦の孝行。兄上達一門残らずかばねをさらす必死の戦場、我一人都へ歸り、何面目にながらへん。是より一谷へ馳行、父にかはりて陣所を固め、潔う討死して、名を後代にとどむる覺悟。親に

あまり云々一鑑
に障泥をうて
走らす

さき立つ不孝の罪、御赦されて下さりませ」と、思ひ込んだる其有様。母上思はず兩手を上、「ヤレでかしやつた敦盛、それでこそ我子なれ。チ、嬉しいぞや。いで餞別を祝わん」と、召したる檔、ひらりと脱ぎ、「總じて軍に立時は、敵に矢種を隠す爲、母衣をかけると聞傳ふ。是をかけて出陣仕や」と、心の内は僅ぞと、いはぬ情や母の衣、やなぐひに打かけ給へば、「ハッア御芳志有がたしく。コレく玉折、跡に残つて我にかはり母上に孝行有。戰場へ連行事は叶はぬ」と宣へば、姫はわつと泣出し、年月待た夫婦の盃、かはす間もなく振捨て、残れとはどうよくな。わたしやどこ迄も付て行。邪魔に成なら今爰で、おまへの手にかけて殺してたべ。なんほうでも離れはせぬ」と、鞍に取付鎧にすがり、歎したふぞいぢらしき。敦「イヤ未練なりそこ放されよ」と、あせり給へばみだい所、「ノウ敦盛、一門の人々も皆妻や子を具し給へば大事な、連れて出陣く」と、聞より姫は有がた涙。母の方を伏拜み暇乞さへあら駒の、手綱に引添ひいさみ立女房達も取々に、御見立申せば敦盛卿、時刻移ると鞭ふり上、「然らば母上もふおさらば」「チ、さらば」さらばくの別れの聲も、母の耳にはきつと立、駒のいななき轡の音、あおり立つてぞ打たせらる。跡見送りて藤の方、こらへくし溜涙、一度にわつと聲を上、

どうどひれふし給ふにぞ、女房達走寄り、「いかゞ渡らせ給ふぞ」と、様々いたはり参らすれば、みだいは涙の顔を上、「悲しい物は浮世の義理。敦盛計此母が臆病に育てし故、軍にも得立ぬとさけしみが口惜さ、討死にやる母が思ひ、十五や六の小腕といひ、稚い時から舞樂を好き、軍の事はしらぬあの子、つる殺さるゝは知れた事。鎧兜を著て出たのが、千騎萬騎を討取て、ぶん取高名したも同然。わけてかはいや玉折が、歌の會か香きゝに行やうに跡を追ひ、いた心根がいぢらしい。やるまいと思ひしが、夫婦と成たしるしには、一夜の枕もかはさせたく、二つには敦盛が、妹背の縁にひかされて、軍をまとめてゐるならば、一日でも討死の、便を遅ふ聞ふかと、はかない事を心の頼親の因果」と計にて、身を投ふして泣給ふ。横の尾裏葉染衣も、めいゝ夫の行方迄、思ひくらべて一時に、又もや袖をしほりける。歎きの耳を驚かす、ゑいゝ聲に人々は、「すはや敵こそ入たれ」と、みだいを奥へすゝめやり、通路の鈴の綱引ちぎり、てん手にたすきにかけ置たる、長刀太刀小太刀をかまへ、恐れけもなく待かけしは、遺名におふ平内左衛門、越中かづさが妻女とは、いはねどしれてかひゝし。時もあらせず入來るは、平山が郎等成田の五郎、大勢引具し大音上、「ヤア經盛はいづくに有。主人平山の武

けもないー少し
もない
げんさいー銜妻

者所末重、時忠卿と相談有、玉折姫を取戻し、他人と成て經盛一家、討亡ほせとの仰を
受、成田の五郎向ふたり。急ぎ玉折姫を渡し覺悟せよ」と罵れば、「やア推參なる小二才
め。敦盛卿の簾中に定まつた姫君様、武者所でもむしやくしやでも、けもないーやる
事ならぬ。長居せばめに物見せん、早く歸れ」と呼はつたり。吾ヤア延過ぎたけんさい
め、かたつばし打殺せ」と、下知に隨ふけらい共、拔連れく切てかよれば、心得多勢
を相手にして、ひるますさらず三人が、蜘蛛手かくなは十文字、或は大けさ車切、太刀長
刀の稻妻に、「こりや叶はぬ」といふやいな、主もけらいも我一に、表をさして逃出るを。
「のがさじやらじ」と、三重追ふて行。跡にみだいは「これのふく、長追無用あぶない」
と、あせりながらも油斷なく、一間に筋し弓と矢つがひ、立出で給ふ折も折、取てかへ
す成田の五郎、かけ向ふ出合頭、切て放せばあやまたず、胸板はつしと射ぬかれ、どう
ど倒れて死したるは、云合せたるごとくなり。追々歸る女房達、此體を見て、「お手がら
お手がら、あはれ成田が身の果」と、どよめく所へ又むらく、討ちもらされの家來共、
「主人の敵」と込入を、「イヤ面倒な」と三人が、まくり立たる太刀先に、刃向ふ者も嵐の木
の葉、ちりくばつと逃けちつたり。女房達聲々に、「サアく申込みだ様、此浦船に打

染衣云々―染め
る、裏、巻と女
房の名にかく

乗りて、八島へ渡り殿様に、尋逢せ奉らん。又も敵のこぬ内に、いざさせ給へ」とい
さみ立、すゝめ申せどつまや子の、別れ思へば便なく、足ももつるゝ藤の方、涙に袖を
染衣が、いさんで見せる心は裏葉、けに武士の女房は、敵も舌を楯の尾と、ふり返つた
る女武者、みたり四人が打連れて、あゆめど跡へ引戻す、濱の眞砂路つきせぬ思ひ、通
ふ千鳥の浦傳ひ、船場の磯へと急行く。

第二

酒極る時は亂る、樂しみ極る時は悲しむとかや。二十餘年の榮花の夢、跡なく覺めて都
をひらき、平家の一門楯籠る、舞須磨の内裏の要害、前は海上はけはしき、鶴越、追手は
生田搦手は、一谷の山手より、浪打際迄柵ゆひ廻し、赤簇風に吹靡かせ、參議經盛の末
子無官の大夫敦盛、父に代つて陣所をかため、事嚴重に見へにける。江戸比は彌生の初つ
かた、月さへ入てくらき夜に、熊谷が一子小次郎直家、先がけして初陣の高名を顯はさ
んと、出立姿は澤瀉を、一しほ摺つたる直垂に、小櫻威の兒鎧、猪首に著なす星兜、星
の光りに只一騎、心は剛の武者草鞋、足に任せてはやりをの、山道岩角嫌ひなく、一谷

小櫻威―小櫻の
模様を除く外監
に染めたる皮に
て威したる鎧

猪首一兜を仰向
けて敵に恐れぬ
體

の西の木戸陣門に走りつき、息ついで四方をながめ、小「ハッア嬉しや。我より一番に先が
ける者もなし。跡より人のつどかぬ中、切入ん」とかけ廻れど、亂杭さかもぎ透間なく、
厳しく戸ざす陣所の門、「いかどはせん」と見廻す内、遙の奥に管絃の音、夜は深更に及
んだら。折節山路に風もやみ、海上も波しづまれば、伎樂のしらべ哀れけに、さも面白
く聞へけり。小次郎は思はずも、心耳をすまし聞とれて、「ハッア實も上臈都人は、情
もふかく心もやさしと父母の物語、今こそ思ひ合せたり。かゝる亂れの世の中に、弓矢
さけびの音はなく、糸竹の曲をしらべ、詩歌管絃を催さる。ハ、ア床しさよ。いかなれ
ば我々は、邪見の田舎に生れ出、鎧兜弓矢を取、かくやんごとなき人々を、敵として立
向ひ、修羅の劔をとぐ事は、淺ましき」と計にて、覺へず涙をながしたる、まだうら
若き小次郎が、身の程々を汲分けて、感ずる心ぞしほらしき。後の方に蹄の音、誰なる
らんと窺ふ内、平山の武者所馬上ゆよしくかけ來り、小次郎が影見るよりも敵か味方か
いぶかしく、「何者なるぞ」と聲かくれば、小次郎もすかし見て、「ヤア末重殿か」末さい
ふ和殿は。コハ小次郎か」と馬よりおり立、「アウ我より先へ來る者はよもあらじと思ひ
しに、ホ、心がけ神妙々々。外の人なら平山が、先陣を爭ふて一番に乘入んが、初陣の

ゆるしく頭ま
しく

しの幫—私の幫
武藏七鼠の一

健氣さに先陣を汝に譲る。氣遣なしに切入く。」小「イヤなふ平山殿、あの管絃の音御聞なされ。扱も雲の上人は又やさしさが違ひますの」末「イヤサ夫を和殿は得知るまい。昔諸葛孔明が司馬仲達に押寄せられ詮方つき、櫓にて香を炷いて悠々と琴彈いて居るを見て、謀もあらんかと、我智恵に迷ふて仲達は逝しと聞。アレあの管絃も其通り、何怪しむ事はない。早かけ入て高名せよ。但和殿がおそろしくば、某が先陣せうか。何とく」と氣を持され、血氣にはやる小次郎直家、木戸口に走寄、門打たよき大音上、「敵の陣へ物申さん。武藏國の住人しの黨の簇頭、熊谷次郎直實が一子同苗小次郎直家、先陣に向ふたり。平家方に名有人々出あふて勝負有」と高らかに呼はれば、門内も騷立ち、「すはや敵の寄せたるぞ、出向ふて討取」と、木戸押ひらけば小次郎は、太刀抜きかざしかけ入を、「ソレ遁すな」と軍兵共、俄にさわぐ鯨波、太刀音人聲かまびすし。平山いかどためらふ所へ、熊谷の次郎直實、我子の先陣心にてつし、足を空にかけ來り、「ヤア平山殿候ふな。悴小次郎見給はずや」と尋を待たず、「さればく、最前是へ見へし故、小次郎に色々段々あの大勢の敵の中へ、一騎打は叶はぬぞや、ひらによしに召れ後詰を待つての事がよかる、というくにいさめても、はやり切たる若者、無一無三に切込れし」

くろくくくくく
くよ

六具一胸、小手、
袖などの六種の
武具
まつしぐら一向
ふんずけ
さしつたり一オ

と、聞より直實髪逆立ち、子を失ひし獅子の勢ひ、敵の陣へかけ入たり。諸爰やかしこの
関の聲、聞に平山獨るみ、「ホウ思ふたつほく。親子共に袋の鼠、今の間に討れおろ。

日頃からあの熊谷めと六彌太めが出頭を、くるくと思ふて居たに、エ、時節も有ば有
物、手を濡さず風の神よりよい敵。其上親子も剛の者、死物狂ひと働かば、よつほど敵

もなやましおろ。あらごなしさせ討死さし、其跡へしかくれば、高名手がらは思ひの儘。
うまいぞくくく」と、ぞくくいさみ悦ぶ所へ、木戸口にあなたの大聲、スハ敵ぞと身

がまへし、窺ひ居るもくらまざれ、熊谷次郎直實我子を小脇にひんだかへ、陣門をすつ
とかけ出、「ノウ平山殿おはするか。忤小次郎手を負ふたれば、養生加へに陣所へ送らん。

お手がらあれ」と言捨て、飛ぶが如くに急ぎ行。平山案に相違して、油断ならずと馬
引よせ、打乗る間もなく門内より、あなたの軍兵、抜つれて、我討留めんとかけ出れば、

心得たりと抜合せ、受つながらしつ多勢を相手、火花をちらしていどむ内、無官の太夫敦
盛は、さはやかに六具をかため、駒をすよめて乗出し、平山を見るよりも、まつしぐら

に打寄給へば、さしつたりと渡り合、しばしはさよへ打合しが、先を取られし武者所、
に多勢に取まかれ、臆病神の誘ひてや、駒の頭を引かへし、行先しらす逃出せば、敦「ヤ

イ合點

じゆつながら
苦みに堪へぬ

あたゝ馬聲

アきたなし返せ」と聲をかけ、いづく迄もとあをり立、跡をしたふて三重追ふて行。玉敦
 盛様ア、太夫様のいふ。此くらしいのに只お一人、あぶないはいのふお歸り」と、いへど
 あてども波ちかき、磯ばたをうろくと、袖は涙の玉折姫、夫を尋て朧夜に、心細身の
 一腰かい込み、あなたへ走りこなたへ迷ひ、すまの浦邊をそこよ爰よと、尋さまよひ給
 ひけり。早しのよめに人顔も、ほのかに見へし山道より、平山の武者所、漸迤けのび
 すまの浦、駒の足を休めんと、暫く息をつぐ中に、玉折姫と見るよりも、やがて馬より
 飛んでおり、つかくと立寄つて、まコレお娘、テモよい所で出合ました。いづぞや京
 で見初めてから、目の先にちらつくやうで、起てもねても忘れず、思ひ餘つてそ様の
 親御、時忠殿へいふたれば、やらふと有を幸に、迎ひにやつた其跡でも、ア、き娘な
 らじゆつながら、マアねてからどふしてかふしてと、ほんにくどこもかも、木のやう
 に成て待てゐるに、迎ひにいた立番を殺し、よう待ほうけにめさつたなふ。サア乗物の
 かはり此馬に乗せ、連れていんで女房にする」と、引立てばふりはなし。玉エ、あたゝ
 やらしい。親が赦そがどうせうが、敦盛様とは二世の約束。かういふ内にも御行方を尋
 逢ふて死なば一所。邪魔仕やんな」とかけ行をひんだかへ、「ムウ敦盛を尋るのか。コレ

なんほ尋ても敦盛の行方、水の底迄有所はしれぬ」玉「そりやなぜに」末「チ、敦盛はたつた今、我手にかけて討て仕廻ふた」玉「ヤアなんと、敦盛様を討つたとや。ハアはつ」と計にどうどふし、人目もわかず聲を上、歎きしづませ給ひしが、「夫の敵」と身がまへし、切付る腕首擱んで、末「ヤアこいつ手向ひか、モウ了簡ならぬ、といふ所をいはぬ。ても此手のやはらかさ、じんじやうな事はいな。モどふもく。エ、武者震ひのする程どふもならぬ。コレ悪い合點じや。とんと心を入かへ、おれに随ふ氣にならしやれ。女房に持てかはいがる。サ、どうかく」と猫なで聲、姫はいかりの涙まじり、「コリヤ世が世なら、そちが様なむくつけな侍は、傍邊へもよせ付ぬに、随へのなびけのとは、穢はしいまはしい。エ、腹立や」と又切付る、腕首捻上取ておさへ、末「サア女房に成かならぬか、いやなら殺すが何とく」と、太刀拔持て傍若無人。玉「チ、殺さば殺せ畜生め。エ、誰ぞ強い人が来て、こいつを切てくれぬか」と、もだへ給ふぞいたはし。強氣の平山むつとせき上「ヤア、につくい女め、なびかぬ上に色々の雑言、恥面かよされ堪忍ならず。生置て人の花と詠めさすもむやくしい。思ひ知れ」と持たる刀、胸板ぐつと突通せば、「あつ」と一聲苦しむ折から、後の方に鯨波、末「すは又我を追ひくるや」と、

まさなふきた
なく

いそふれーさあ
来い
しほらしー感心

駒を引寄飛乗りて、逸散に其場はるかに落失せけれ。諸去程に御船を始めて、一門皆々舟にうかめば、乗おくれじと、汀に打寄すれば御座船も兵船も、遙にのび給ふ。無官の太夫敦盛は、道にて敵を見失ひ、御座船に馳付いて、父經盛に身の上を、告げしらす事有と、須磨の磯邊へ出られしが、舟一艘も有らざれば、詮方波に駒を乗入、沖の方へぞ打せ給ふ。かよりける所に後より、熊谷の次郎直實、「チ、イ、イ」と聲をかけ、駒をはやめて追かけ來り、「ヤアそれへうたせ給ふは平家の太將軍と見奉る。まさなふも敵にうしろを見せ給ふか。引返して勝負あれ。斯中 某は、武藏國の住人熊谷次郎直實。見參せん返させ給へ」と、扇を上て指招き、「暫し／＼」と呷はつたり。敵に聲をかけられて、何か猶豫の有べきぞ、敦盛駒を引返せば、熊谷もすよみ寄、互に打物抜かざし、朝日にかどやく劔の稻妻、かけ寄りかけよせてう／＼。てふの羽がへし諸鎧、駒の足竝かつし／＼。かしこは須磨の浦風に、鎧の袖はひら／＼。むれるる千鳥村千鳥、むらむらばつと引汐に、寄せてはかへり返りては、又打かくる虚々實々、勝負も果てし有らざれば、「いそふれ組まん」と敦盛は、打物がらりと投給へば、「コハしほらし」と熊谷も、太刀投捨て、駒を寄せ、馬上ながらむつと組み、忍い／＼の聲の内、互に鎧を踏み

ばづし、兩馬が間にどうと落つ。すはやと見る間に熊谷は、敦盛を取ておさへ、「かく御運の極る上は、御名を名乗直實が、高名譽を顯はし給へ。又今生に何事にてとも思ひ残す御事あらば、必達し参らせん。仰置れ候へ」と、懇に申にぞ、敦盛御聲さはやかに、「チ、やさしき志、敵ながら通勇士。かく情有武士の、手にかより死せん事、生前の面目。戦場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、兼てなき身と知るゆへに、思ひ置事さらになし。去ながら忘れがたきは父母の御恩。我討れしと聞給はど、嗚御歎思ひやる。せめて心を慰む爲、討れし跡にて我死骸、必父へ送り給はれかし。我こそ参議經盛の末子、無官の太夫敦盛」と、名乗給ひしいたはしさ。木石ならぬ熊谷も、見るめ涙にくれけるが、何思ひけん引起し、鎧の塵を打ちはらひく、「此君一人助けし連、勝軍に負もせまじ。折節外に人もなし。一先爰を落給へ。早うく」と言捨て、立別れんとする所に、後の山より武者所數多の軍兵、「ヤアく熊谷、平家方の大將を組敷ながら、助けるは二心に紛れなし。きやつめ共に通すな」と聲々に罵るにぞ、熊谷はつと計、いかかはせんと默然たり、敦盛嘯しとやかに、「迎も遅れぬ平家の運命、爰を助かり行先にて、下主下郎の手にかより、死恥を見せんより、早く御身が手にかけて、人の疑ひはらされ

よ」と、西に向ひて手を合せ、御目をとちて待給へば、いたはしながら熊谷は、御後に立廻り、彌陀の利劔と心に唱名、ふり上は上ながら、玉の様な御粧ひ、情なやむざんやと、胸も張裂氣おくれに、太刀ふり上し手もよはり、思ひにかきくれ討かねて、歎きに時も移るにぞ、歎「ア、おくれしか熊谷、早々首を討たれよ」と、捻向給ふ御顔を見るに目もくれ心きへ、「忤小次郎直家と申者、ちやうど君の年恰好、今朝軍の先がけして、薄手少々負ふたる故、陣屋に残し置たるさへ、心にかゝるは親子の中。それを思へば今爰で討奉らば、嗚や御父經盛卿の、歎きを思ひ過されて」と、さしにも猛き武士も、そぞろ涙にくれるたる。歎「ア、愚や直實、悪人の友を捨て、善人の敵を招けとは此事。早首討つてなき跡の、回向を頼さもなくば、生害せん」とすゝめられ、直「ア、是非なし」とつゝ立上り、「順縁逆縁俱に菩提、未來は必一蓮託生。なむあみだ佛南無あみだ佛」首は前にぞ落にける。人の見る目も恥かしく、御首をかき抱き、曇し聲をはり上て、「平家の方に隠れなき、無官の太夫敦盛を、熊谷次郎直實討取たり」と呼はるにぞ、磯に臥したる玉折姫、絶入し氣も一筋に、夫をしたふ念力の、耳に入しかむつくと起き、「ノウしばし待てたべ。敦盛様を討つたとは、いかなる人かノウうらめしや。せめて名残に御

よびのくわげん
一宵の管絃か

あまざかるゝひ
なの枕詞

顔を一目見せて」といふ聲も、深手によはる息づかひ。見るより熊谷御首携へあゆみ寄り、「敦盛をしたひ給ふはいかなる人」と尋れば、今はの苦しきこはねにて、「我こそは敦盛の妻と定まる玉折姫。御首はどこに。エ、もふ目が見へぬ」と撫廻せば、真ム、何お目が見へぬとや。ヲいとしやく、御首はコレゝ爰に」と手に渡せば、わつと泣くしがみ付、膝にのせ抱きしめて、消入絶入歎きしが、「ノウこれ敦盛様、アはかない姿に成給ふなふ。陣屋を出させ給ひしより、御跡したひ方々と、尋る中に源氏の武士、平山の武者所我を見付て無體の戀慕。だまし討んも女業。此ごとく手にかより、二人が二人で悲しいさいご。せめて別れに御顔が、見て死にたいと思へ共、深手に心が引入て、目さへ見へぬか悲しや」と、又御首を撫さすり、「よびのくわげんの笛の時、後にと有し御詞が、今生後生の筐かや。此世の縁こそ薄く共、來世では末ながう、添ひとけてたべ我つま」と、顔にあて身に添へて、思ひの限り聲限り、なくねはすまの浦千鳥、涙にひたす袖の海、引汐時と引息の、ちしごと見へて絶果てたり。熊谷は茫然と、どちらを見てもつほみの花、都の春よりしらぬ身の、今魂はあまざかる、鄙に下りてなき跡を、とふ人もなき須磨の浦、なみくならぬ人々の、成果つる身のいたはしやと、ひたんの涙に

鹽手―鞍の前輪
 後輪とに二箇づ
 つ付くる紐
 檀特山云々―釋
 尊檀特山にて馬
 別れし給ふをい
 の口取車匠と愛
 ふ
 塩生―見苦しき
 案にいふ
 つたりさせてふ
 秋風に縋びぬ
 らし藤袴つたり
 させてふきり
 ふくすなく
 いさくめ―かり
 そめ
 つげ櫛―黄楊の
 櫛と告げ
 歌枕―歌に讀入
 るる名所

くれけるが、是非もなく、玉折のなきがらを取おさめ、母衣をほどいて敦盛の、御死
 骸を押しつゝみ、總角取つて引結び、手綱をたぐり結付る、鞍の鹽手やしをくゝと、弓
 手に御首たづさへて、右に轡の衰けに、檀特山のうき別れ、悉陀太子を送りたる、しや
 のく童子が悲しみも、同じ思ひの片手綱、涙ながらに三重歸りけり。昔より爰も名におふ
 津の國の、兎原の里に幽なる、塩生の宿に獨居の、林は老の營に、糸針取つて人仕事、
 つどりさせてふ洗濯の、糊かい物を打盤の、手元も暗き黄昏時、世のうきにいさよめな
 らぬ身の願ひ、忍びて人につけ櫛の、薩摩の守忠度は、俊成卿の館より、須磨の陣所
 へ歸らんと、急ぎの道も行暮れて、やどりもがなと爰かしこ、あれし軒端もまばらなる、
 ふせやの門に立寄給ひ、「都方より西國へ歌修行の旅の者、案内もしらぬ道に勞れ、日も
 暮れたれば迷惑致す。卒爾ながらお宿の御無心、頼入」と有ければ、圭ハア、いや爰は
 所の法度にて人宿は致さね共、我も人も行暮れて、宿のないはなんぎな物。殊更優しき歌
 枕、御修行のお方と聞ば別條も有まい。宿はせず共マアはいつて、たばこでも参りませ」
 と、戸口を明て、「ハアおまへはどふやら見た様なお方じやが、チ、それよ、前方都でお目
 にかゝつた忠度様でござりますな」思ふ、そなたは五條の三位に居た、菊の前の乳母で

かゝるべき一
身を
寄せるべき

ないか」主「成程々々、ハテめづらしや、お久しや。先こなたへ」と伴ひて上座に直し手をつかへ、「マア何か指置お尋申ませうは、此度源氏の軍勢、平家を責めんと都へ亂れ入に付、御一門残らず西國へ落させ給ふと承りましたが、お前計何として今迄都にはござりました」思「ホウ其子細は兼てそなたもしる通、某は俊成卿の和歌の弟子といひ、分けてしたしき中なるが、此度師卿撰れし千載集に、我詠歌を加はりなば、譬敵の手にかより、かばねは野山にさらす共、此世の本望敷島の、道を求めしかひならん、と思ふ心の一筋に、狐川より引返し、俊成卿の館に立越願ひしが、かかる時節に平家の詠歌、私に加へん事もいかどと、息女をもつて尋の爲、源氏方へ送られしが、いまだ其沙汰なき内に、早合戦最中と聞、心せかれて立歸る。生田の陣所も程ちかしとは言ひながら、暮に及べば陣門もひらくまじと、此所へ立寄しもふしぎの縁」と宣へば、主「さればわたしも稚なじみの夫が不所存、置法にして行衛知れざる折から、縁を求めて俊成様へ乳母奉公。養君菊の前様御成人に付お暇申、かゝるべき性も有たれど、性がわるさに勘當致し、今獨身の貧樂と、應ぜぬ苦勞はござりませぬが、承はればおまへと菊の前様は、どうやら譯の有、ハアいや私に御遠慮はない事。夫に付てお咄申

しすましー知ら
ずにかく

これくも云々
—賭事などにつ
きても餘り他人
に馬鹿にはされ
ぬ

事も有^{あれ}ど、こりやおつての事。まあく遠路^{ゑんろ}のお草臥^{くたびれ}、あれへござつてお休み^{やすみ}と、いふもやさしき饗^{もてなし}に、貧家^{ひんか}の塵^{ちり}も繕^{つづろ}はぬ、主^{あるじ}が案内^{あんない}に打連^{うちつ}れて、一間^{いっかん}にこそは入給^{いりたま}ふ、まだ宵^{よひ}ながらかきくもる、空^{そら}も心もくら紛^{まぎ}れ、うそく窺^{うかが}ふ大男^{おほやうきこ}、枳殼^{きこく}の生垣^{いけがき}押破^{おしやぶ}り、ねつとはいつて揚口^{あがりぐち}、納戸^{なんど}へしかける指足^{さしあし}ぬき足^{あし}、忍^{しの}び込^こ間に主^{あるじ}の林^{はやし}、物音^{ものおと}聞付^{きこつけ}立出^{たちで}て、窺^{うかが}ひる共^{とも}しすまし顔^{がほ}、袋^{ふくろ}に入りし一腰^{ひとこし}かい込^こみ、そりりくと表^{おもて}の方^{かた}、出^{いで}んとするを、主^ま「コリヤ待^{まち}」と、聲^{こゑ}かけられて恠^{びっくり}りし、逡行^{しゆんぎやう}所^{ところ}を飛^とびかより、むしやぶり付^つて引戻^{ひきもど}せば、遁^{のが}れんやらじと搦付^{つかう}き、引^ひつばるはづみに頬^ほかぶり、脱^ぬけて落^おちたる顔^{かほ}見付^{みつけ}、主^ま「ヤアわ^わりや太五平^{たごへい}ぢやないか」太^たア、これく母^{はは}じや人^{ひと}、聲高^{こゑだか}にいはいしやんな。盗人^{ぬすびと}を捕^とへて見^みれば我子^{われこ}也^{なり}けりじや。人^{ひと}がしつてはおれよりまあ、こなたの外聞^{ぐわいぶん}が悪い^{わる}の」母^{はは}「テモ搦^にも憎^{にく}やのく。汝^{おのれ}が様^{やう}な性^{しやう}の悪い^{わる}やつが有^あるか」太^た「ハテ有^あればこそ酒^{さけ}も飲^のみます、色事^{いろこと}はこつち任せ、三絃^{さんげん}もしつくりかぢるてや。喧嘩^{けんわ}もめつたに前^{まへ}先の見^みへぬ事はせず。又^{また}これくもあんまりにじりかすりはくひませぬはいの。ア、慮外^{りよぐわい}ながら萬能^{まんのう}に達^たした男^{おとこ}」母^{はは}「サア其^{その}悪い^{わる}事が積^{つも}つて親^{おや}に様々^{さまざ}難儀^{なんぎ}をかけ、妹娘^{いもむすめ}を勤奉公^{つごめほうこう}にやつたも皆^{みな}汝^{おのれ}故^{ゆゑ}。まだ其上^{そのうへ}にうはぬりかけ、盗^{ぬす}する様^{よう}に成^なつたは、よくく因果^{いんぐわ}な生^{しやう}れ性^{しやう}。そしてまあ外^{ほか}でも

有事か、親の内へ盗にはいるとは「太ア、これく、こなたもほんに年に似合はぬまだな事はしやるわいの。コレ他人の所へはいるとの、忽此首がござらぬはいの。そこで若見付られても命に氣遣ひのない様に、高をくよつて親の内へはいつたは、我子ながらもア、發明な者じやと譽めてはくれいで、何じややらぐどくくくと、愚痴な事計いはしやるはいの。コレそんな事聞きや氣が盡きます」と、いひつゝ腰のすつほんから有あふ茶碗へどぶくく。母「ソレそれく其酒が止まぬから發つて横著な氣も出るはい。コリヤやい、見るかけもない此母がな、人仕事して漸と、其日を送ればいかなく、一錢の貯も」太「サア有てたまる物かいの。ない事はおれがよう知てゐる。じやによつて錢銀の望はない。コレ此一腰がほしさに」母「イヤそりやならぬ」太「いはしやるは、エ、親父殿が残し置かれた重代といふ事か。サア夫じやによつてよふ切れうと思ふて盗心は、商せうにも資本はなし、仕覺へた職もなければ、人足廻しの茂次兵衛所にかよつて居て、歩荷持しても儲にくい物はれそじや。夫に毎日飯代を拂はにやならず、三文でも餘つた時は、かたかはくんでやつてのける。是じや濟ぬと思ふから、ふつと氣の付たは、今源平軍の中、うそくと見廻つて、拾ひ首でもしたら、知行に成まい物でもない」と、

れそ一錢の事か

思ひ付は付ても、是も丸腰ではならぬ商賣。夫で此刃物を盜とはいふ物の、親の物は子
 の物じや。コリヤ貰ひますぞや」母「アレまだのぶとい事計。子なればやれど、わりや勘
 當したりや他人じやはい」本「そんなら借ります」母「イヤならぬ」と、せり合中へによつ
 とくる、人足廻しの茂次兵衛が、「ハア太五平爰にか。ばさま何やらせり合しやるが、ア
 ア扱は勘當の詫を聞まいといふ事か」母「イヤなふ説所じやござらぬ。やつぱり性根が」
 茂「ア、コレく直らぬとはいはれまい。おれが世話にしてからめつきりとうよう成りま
 したぞや。もふ了簡してやらつしやれ。コリヤく太五平、うつかりとしてゐる所じや
 ない。此度の軍に付て弓持の鎧持のと太分人夫が入故、それくの人をせんさくしてや
 つたが、まだ簇持がたらぬ故、そちをやらうと思ふて一遍尋た。外の事よりしんどうは
 せいで、マア賃がよいがいかなぬか」と、聞て林が早氣遣、「賃がようても軍場は命がけ、
 こりやよしにしたらよかる」茂「ハテやくたいもない。高で命に氣遣ひが有ば、雇はれる
 者は一人もござらぬ。あつちの手下と違ふて、道具持は切合の勝負はせず、若流失でも
 くれば楯の後へちやつと隠れる。ばさまゐいか。鎧長刀がひらめけば、人の後へちやつ
 とかどむ。とかくちらほら氣轉きかして立廻れば、怪我する事は微塵もない。ほんのこ

ゑいかーよいか

しんどうー苦辛

こけしちザン間
違なし

どんざー布子

まいつてー呑ん

けしらずといふ物じや。其段は此茂次兵衛が受合。コレ卽先様からきた、丈夫な装束
見せましよ」と、風呂敷ほとき取出すは、雑兵なみの陣笠鎧。見るに太五平ぞくつき出
し、「そりやおれが望所じや。大勢に打交り、ゑいゝわいがいうて見たい」母「チ、サ
そんならちやつと身拵へ」と、てん手に帶とくどんざぬぐ。じばんの上に黒草の、鎧上帶
しつかとしめ、一腰「さすが侍の、小手脚當も似合ふた」と陣笠著せて、茂「コレ太五平、
そちは先様知るまいから鼻に所を」本「チット合點母者人」母「チ、そんなら太刀の折紙を、
添へてやらふ」と納戸より、取出し渡せば、「忝いゝ」母「コリヤ怪我すなよ」チ、夫
もよいゝ、此形もよい、よいやな、よい、よいやな、よいゝゝゝゝよいやな。身ぶ
りは練物見るごとく、いさみすゝんでこそは急行く。林は跡を打ながめ、「かたはな子が
かはゆいと、有様は不便にござる。とにもかくにもお前のお世話、忝うござります。お
禮がてらに酒一つ進ぜたいが、奥には仕事を取ちらして置ました。納戸で成りとまいつ
て下され」茂「イヤそりや御無用」林「ハアテ買ふては進ぜぬ。餘所から貰ふた諸白に、鰯
の肴でたつた一つ。是非にゝ」と無理やりに、納戸へ押やり勝手から、銚子盃持行も、
子故のあいそとしられたり。風さそふ道の時雨も戀ゆへに、身は濡鷲の菊の前、走付た

一つ家の、門の戸けはしく打たとき、「明けてく」と宣へば、林は聞付、「誰じやく」
 菊「イヤ大事な者じや」林「大事な者とは」菊「ハテわしじや、菊の前じやはいの」林「ヤ
 アお姫様とは心得ぬ」と、庭にかけおり戸を明けて、「ほんにそふじや。まあくお入遊
 ばせ、といふ中もどふやら氣づかひ。見れば付添人もなし。何として夜に入てお一人お
 出なされたぞ」姫「さればいの、忠度様の遊ばした、お歌の事にとやかくと隙取内を待兼
 て、お立有しと聞と早、跡をしたふて出たれ共、心に任せぬ女の足、爰迄來ても追付れぬ。
 道はしらず日は暮る。そなたの所は前方に、摩耶參りの時よつたを便、漸尋あたりし
 が、此やうにおくれては、忠度様に逢ふ事は」林「成共く」姫「そりや又どふして」林「コレ、
 忠度様は先程お出なされて奥にごさる」姫「ヤアそれはほんか、嬉しやく。早う逢たいあ
 はしてたも」林「成程お逢なされませ。じやがコレ旅草臥で休んでござる。けたまましう
 起さずと、そつとはいつて肌身を付、しつほりと御寢なれ」と、粹な詞におもはゆく、
 「テ、乳母とした事が、じやらくと何ぞいの。わけもない事計」と、いひつゝ片頬に笑の
 眉、ひらく襖も待兼で、いそぐとして入給ふ。折節納戸の暖簾上、欠まじくら立出る茂
 次兵衛、「ばさま、いかひ雜作でござつた」林「是は扱わしとした事が、不作法な亭主ぶり」
 ひらく一眉と襖
 にかけていふ
 まじくら一交り
 かしく
 おもはゆく一恥

くつ入云々―老
病と見えて
とつかは―急忙

ありそ海―有磯
海にて有りにか

「イヤモ手じやくでたべつおさへつ、銚子切引かけたりや、くつ入かしてぐつたりと寢てのけた。内に大分用が有。いかる馳走。其内きましよ」と言捨て、とつかは急ぎ立歸る。時しも一間さはがしく、何の様子か菊の前、襖をあけの裾けはらし、かけ出給へば林は驚「コレく申」と引とどめ、「何事がおこつたか氣色をかへてとつかはと、お前はどこへござります。様子おつしやれ。どふじやく」姫「サア其様子は、忠度様がどうよくな、わしに暇をやるといの」林「ム、そんならお前のお腹立は尤じやが、高いも低いも夫が女房に暇をやるは、よくく了簡ならぬ筋か。其譯を立なされにや、コレ科ないお前に疵が付ぞへ。マアとつくりと氣をしづめ、思案して御らふじませ」姫「イヤ思案迄もない、其譯は立て有ど、互に思ひ初しより、夫と妻よと云かはし、一生添ふと思つた物。縁切れてはかた時も、何とながらへ居られうぞ。恨つらみもありそ海一思ひに身をしづめ、底のもくずとなる覺悟、とめずと殺してたもいのふ。死るく」と計にて、跡は詞も涙なる。「イヤ、何ほそふおつしやつても、乳母はどふも合點がいかね。是には定めて深い様子が」忠「ホウ其子細は忠度が、とくと申聞せん」と、しづくと立出給ひ、「天の憎所天必誅罰すと。入道の不善一門の積惡によつて、かく迄傾平家の運。此度の戦ひも、

十が九つ味方の敗軍。某も討死と覺悟極めし事なれば、いつを期してか添果てん、思ひ切て歸られよと、いへ共中々聞入ず、陣所へ伴ひ行んと有。時には忠度女に迷ひ陣中迄俱したりと、世の人口にかよるといひ、死後迄縁を切されば、俊成卿の御身の上、平家にしたしき咎を受、つひには源氏の仇と成て、亡び給はん悲しさに、慙と難面いひ放し、暇をやりしは忠度が、師の厚恩を報ぜん爲、恨ど思ひ給ふなよ。とはいへもしも運に可ひ、軍に勝ばながらへて、二度逢んも計がたし。夫を頼に行末の、契を樂しみ待給へ」と、口にはいさめ心には、是今生の別れぞと、思ひ廻せばいぢらしく、さしも武勇にはり話し、弓弦の切し心地にて、ゐるもゐられぬ座をそむけ、脇目に餘る御涙つよみ兼させ給ふにぞ、夫と悟りて菊の前、「イヤノ、何ほ其様に、ふたとび逢ふの添れるのと、潔うおつしやつても、誠しからぬ身の覺悟。討死としりながら何と見捨ていなれふぞ。いづく迄もお俱して、生る共死ぬる共、一所でなけりやわしやいやく。むごいつれないお心」と、縋り付て泣給へば、林も心根思ひやり俱に袂をしほりしが、慙といさめの聲はけまし、「今の程事を分け、利害を説いて云ひなさに、達てお供とおつしやれば、親御様へは不孝といひ、殿御の爲には猶ならぬ。いかに嫌ごせなればとて、其辨へがないか

いのふ。ア、うとましいお子では有」と、詞を盡して俱々に、いさめすかせどいやおふの。答も涙中々にはなれがたなきふせいなり。折節風に誘はれて、間近く聞ゆる鯨波、耳を突抜く鉦太鼓、亂調に打立々々、どつとかけくる討手の大將、眞先に大音上、「平家の落人薩摩守忠度、此家に忍びおはする由、注進有て慥に聞。召捕ん爲梶原平次景高が向ふたり。譬鬼神なればとて、八方を取かこめば、逆も遁れぬ。尋常に繩かゝられよ。異議に及ばふん込で搦とる。いかにく」と呼はつたり。人々扱は茂次兵衛が、注進せしかと驚けば、忠度ちつ共動じ給はず、二人を奥へ忍ばせて、太刀おつ取てつと立上り、「ヤアおこがましや景高。源平互に鎬を削り刃をあらそふ戦場には向はず、我一人に多勢を以て取かこむ卑怯者。汝ごときにやみく」と繩かゝる忠度ならず。いでや手竝を見せんす」と、太刀拔放し身繕ひ。景高いらつて「ソレふんごめ」下知に従ふ雑兵共、門の戸蹴破り一同に、かけ入くかけ向ふ、多勢を屈せぬ早業に、眞向立わり車切、四方八方はつしく、なぎ立給へは雑人ばら、皆我一に跡すさり。忠度いかりの御聲にて、「うぬらごときに刃物はいらす」と、大手をひろけ待給ふ。手竝にこりぬ雑兵共、一人がかりは叶はじと、大勢一度にどつと寄。引摺では人礫、あやどりなんどを見るごとく、め

さまに組合す敵

さましかりける 三重次第也。勇力無双の働に、さしもの景高氣おくれし、逸足出せば
 雑兵共、叶はじ物と夕波の、立足もなく我先に、むらくばつと逃失けり。相手なけれ
 ば忠度卿、息を休る其中も、油断ならざる埴生のやどり、いかゞしてふせがんと、心を
 くぼる時しもあれ、又もよせくる 関 貝鉦鼓責太鼓、手に取如く聞ゆれば、忠度はつ
 と心付、「扱こそ景高、大軍を催し重て向ふと覺へたり。戰場ならば敵の勢、何萬騎にて
 かこむ共打破りかけなやませ、譽を顯はし見せんす物。軍中に引かへし願ふ詠歌も腰お
 れの、望も叶はず 剩へ、さしも名高き忠度が、斯あばらやに身を忍び、敵にかこまれ
 やみくと、生捕れんは後代迄、屍の恥辱名の穢れ。口惜や淺間しや」と、拳を握り齒
 嚙をなし、怒の涙てる月に、電をふらすが如くにて、いたはしくも又道理なり。透もあ
 らせず表の方、寄くる軍兵むら立挑燈、天地をてらし亂れ入よと見る所に、さはなくし
 て討手の大將、かけゑほしに花田の大紋さはやかに、長袴のくよりをととき、悠々然と立向
 ひ、「武藏國の住人岡部の六彌太忠澄、忠度卿に見参」と、しづくと打通り、傍近く謹
 で、「此度源平兩家の軍は、私ならぬ院宜を蒙り、範頼義經罷向へば、兩陣互にはれ
 勝負。潔き軍はせずして、拔がけせし景高が卑怯の振舞、聞に忍びず此六彌太が参り

盛なる時は云々
—先んずれば人
を制し後るゝ時
は人に制せらる
の句をとる

しは義經の嚴命。其子細は、先達て俊成卿へお頼有し御詠歌の内、さど波や、しがの
都はあれにしを、昔ながらの山櫻かな、右の御歌千載集に入しかど、勅勘有御身なれば、
名は憚りて讀人しらすと成し趣。則集に入たる印、此短冊御覽に入よと」山櫻の流
枝に、結び付たる以前の短冊、うやく敷指出せば、忠度につこと打笑給ひ、「我詠歌を
我筆の、願ひも仇花ならぬ印、御芳志の山櫻。ハア、忝し」と押いたどき、「敵味方と
隔つれば打捨置くべかつしを、思ひ寄らざる義經の仁心にて、歌人の數に加はり、和歌
の譽を残す事、生涯の本望、死ても忘れぬ悦びぞや。逆も遁れぬ身の不運、死すべき時
に死なざれば、死に勝る恥有と、名もなき愚人の手にかより、見ぐるしきさいごもせん
かと、後悔せし折に幸、武勇の聞へ隠れなき、六彌太に生捕れば、忠度が恥辱はあらじ。
サアよつて繩かけられよ」と、御手を廻し待給へば、岡コハ心得ぬ御仰。某君の討手
には参らず。敵味方の勝負は戦場。其時は兩家のはれ業容赦はいいぞ。互に時の運に任
せん。但梶原がごときよわみを見かけ、ぬけがけして手がらにせんと、思ふ様な六彌太
と思召るゝか。ハ、はつ」とあざ笑へば、忠度卿理にふくし、「實々は誤つたり。盛
なる時は制し、衰ふる時は制せらるゝ理。いかなれば義經といひ汝迄、誠有一言。心

あんでもない事
— 勿論の事

心の種云々—古
今集序に倭歌は

魂にてつして今さら返す詞もなし。惜からぬ命なれ共、明なば陣所へ立歸り、はなぐ敷軍をせん」國其時望は御邊が首忠度卿は我討取」忠必討れよ」國おんでもない事。アレく八聲の鶏もなく、明る間近しと申せ共、路次の狼藉覺束なし。陣所へ御供仕らん。ソレく用意の馬引」と、飾立たるくろの駒御前に指よする。辭するに及ばず忠度卿、立髪擱んでゆらりとめせば、一間の内より菊の前、「コレなふしばし」とかけ出給ふを、林は押とめ立身で隠せば、岡部の六彌太、夫と悟つて忠度の、脱懸給ひし上著の袖、刀を抜いてふつと切、「コレく乳母」といふに悔り。國ハテ扱ふしぎな顔せまい。總じて老女は嫗といひ、又姥共よぶ。今宵忠度卿の、お宿を申せし御はうびに是を遣はす。それ共若々敷錦のかた袖、年寄が貰うて益なしと思はど、外にほしがる方も有べし。是も其人の形見と思へ共、猶なつかしき袖のうつり香といふ歌の心、其方が耳に、ソレきくの前よく心得てお受申せ」と指出せば、「コハ冥加なき仕合」と、いたどく右のかた袖は、右の腕を落かたの、軍に討死し給ひし、後の哀としられたる。思ひの種や涙の種、仁義を種の六彌太が、東雲近し急がんと先にすゝんで立か弓、いはぬはいふにいやまさる暇乞さへ泣顔に、見送る姿ふり返る、心の種の詠歌も昔ながらの山櫻、散行身にも指

人の心を種として萬の言の葉とぞなりけるとありなづみて―進みかねて

世にあらば云々―下の句御影の松上面がはりすな(續古今集)白毫―佛の眉間にある相にいひかくなむあみだ―無しにかく

かざす、流の枝の短冊は、世々に響を残す種、歎の種の離れ際、いさめを種と隔つれど、はてし涙の悲しみを、俱になづみて耳をたれ、いなく聲も哀そふ、駒の足取り諸手綱引わかれ行曉の、空も名残や惜むらん。

第三

歌世にあらば、又かへりこん津の國の、御影の松と詠置し、一木と俱に年を経し、額の黒痣口くせに、佛の御名を唱をれば、白毫の彌陀六と、人にしられし石屋有。實に交りも信心の同氣同行相求め、朝暮勤る看經の、責念佛の終には、諸國諸山に建置し石塔に有戒名の、數も限りもなむあみだ、願以此功德平等の回向の聲も殊勝なり。日暮紛れに門口へ連立てくる石屋共、「親父殿内にか」といふ聲聞てすつと立出、彌「ホウ同行衆ようござつた。けふは大分忙しさに仕事の形で直に看經。たつた今仕廻た。サ、あがらしやれ。なむあみだく」彌「イヤこれ彌陀六殿、今夜は珠數くりの數右衛門が速夜、百萬遍申によつて誘に來ました」彌「ほんにそふじや、どりや参りましよ。コリヤお岩まだ彦介は戻らぬか。ソレ娘が起たら藥あたよめて飲せ。若石塔を誂さしやつたお若衆が見へたら、戻

なら茶一茶飯の
事
しよざい佛法云
云一佛法より何
より食ふ事が肝
腎といふ諺、し
よざいは所帯の
訛り

る迄待して置け」朋「サア、くござれ、ちやつと念佛かき込で、夜食を申そじや有まいか」
彌「タイ、く佛も百味のおんじき、こちもなら茶の御食せう」しよざい佛法腹念佛、門念
佛を口々に、打連てこそ急行、跡へ下人の彦介が、枌の先にぶらくと網縄引かけ立歸
り「ヤレ、くしんどや。お岩殿肩も腕もめり、くいふは」岩「チ、道理、く嘸草臥。そし
て石塔は建ましたか」岩「イヤまだ建はせぬが、おりや内に用があると思ふて先へ戻つた
が、旦那殿は奥にか」彦「イヤ、く同行中に百万遍が有て参らしやつたはいの」彦「ホウそ
んなら幸、此間小雪様が病氣じやとて引込んでござるは、彼石塔を誂さしやつたお
若衆に、戀煩ひと見たは違はぬ。旦那の耳へ入ぬ内異見せうじや有まいか」岩「イヤそり
やわしも如在はない。此間からいろ、くといふてもいかなく。此戀が叶はねば、井戸へ
身を投るの、首しめて死るのと、こはい事計いうてじや」彦「ホウそりやいやなこつちや
の。ハアそんならかうしや。たつた一度で思ひ切しやれと、とつくりと合點さして、いつそ
逢はなちや有まいか」岩「ハテもふせう事がない。幸今夜お若衆が見へる筈じやが、其間
に旦那が」彦「ア、何のいの、百万遍ならちやつとじや有まい。マア娘御に其譯いふて工面
さつしやれ。おりや寐所で彼時分、獨角力を取ましょ」と、言つと勝手と奥の間へ、別

れてこそは入に 半太夫 けれ。既に其夜も丑滿の、風しんくくと更渡り、いと物すゞき時
しもあれ、ねとりの聲の哀れけに、ほの聞ゆればいと猶、心ほそさといぶかしさ。小
雪は部屋を立出て、灯火かゝけ窺へば、門の戸ほとく打たとき、「頼ませふく」とい
ふ聲は、まがふ方なきお若衆様。ヤレ嬉しやと飛んでおり、戸口を明けて、「ようこそお
出。サアくこちへ」と伴ふて、下に居る間も胸せかれ、顔は上氣のはち楓、指俯て
もじくと、挨拶も出ぬ其内に、お岩が聞付走出、「是はくお若衆様、今日お出の約
束故、只今迄待ましたが、なぜ更けてお出なされた」若「されば手前は少様子有て、人目
を忍ぶ者なれば、晝は勿論夜とても密な時刻を心がけ、態只今参りしが、先達て詔置た
石塔が出来ましたら、彼地へ建て貰ひたさ。先御亭主に逢ましたい」少「イヤとと様は只
今留守でござりますが、おまへがお出なされたら、待せまして置様にとナフお岩」岩「アイ
申付て出られました。歸られます迄名代は、此娘御。お咄の相手にしてうつと答つやつ
つ返しつ、とかくお心安うして進せて下さりませ。サアく奥へ」とすゝむれば、若「然ら
ば左様致さん」と、何の心もつる立て、一間へ通る後かけ、見送るお岩が手を打て、「テ
モ扱も能器量。あの様なお若衆は、日本國を尋ても今一人と有まい。惚さしやんすも道

うぢかは云々ー
うぢくともど
かしい

めんようー不
思議

理々々。したがコレ小雪様、うろ付てござる所じやない。ちやつといて教た通り、何かなしにあたまから抱付いて、こけたがゑいぞや。夫も上へならぬやう、下から随分あしらひなされ。アレまだうぢかはもどかしや。サアく早ふ」とむりやりに、押やり突やり跡びつしやり。「ア、世話やの。どふやらこふやら首尾なつた。是から休もと儘なれど、たつた一重の壁ごしに、隣の餅搗聞やうで、寝られそむないよさりじや」と、いひつゝ勝手へ入跡へ、小雪は立出興さめ顔。「テモめんようなお若衆様、慥に奥へいかしやんしたか、かいくれ姿が見へぬはどふじや。ふしぎく」とうろくきよろく尋る内、こなたの障子さつと開、若イヤ爰に居ますはいの」少是はしたり意路の悪い。いつの間に抜けなさつた。人の思ふ様にもない、心づよいお方じや」と、云つゝ傍へ指寄れば、飛しさつて、「ア、これく、始終の様子を見聞に付、優しき人の志、嬉しいとは云ながら、我身は深き様子有て、假にも妹脊のかたらひをなす事叶はず。縁なき事は前生の約束ならめと諦めて、思ひ切て下され」と、いふも追に氣の毒の、打しほれたる其風情。小雪ははつと力を落し、「譬様子が有辻も、是程に思ひ詰め心を盡すかひもなく、情なふもふり捨ていやとおつしやりや生ては居ぬ。むごい難面お心」と恨歎けば、若いやとよ恨は去事

逢は別れの始—
謎

ひよんな事—と
んでもない事

いとしほい—い
とはしの轉

うぢかは—うぢ
ぐ

ながら、逢は別れの始といふ譬に洩ぬ我身の上。頼置たる石塔が今にも成就してあらば、再び此家へ來らぬ故、逢見る事も叶ふまじ。只儘ならぬは世のならひ、はかなき物は人の身の、一生は皆夢と思へばさのみ迷ひも有まじ。去ながら今を限りの別れといへば、誰しも名残惜い物、若も戀しき折からは、心のいさめ共ならん。いでく筐に參らせんと、錦の袋押ひらき、青葉さかへし笛竹を、渡す心もあぢきなく、戴く身にもさながらに道理に向ふ矢先はなく、「ひよんな事じや」といふより外、詞も涙にくれるたる。折から道々口くせになむあみだ、なむあみだ六速夜よりいきせき戻り門の戸を、「明いく」と打たよけば、「あい」と奥から返事してお岩がかけ出、「旦那様のお歸りそふな。コレ小雪様、折角戀になされたあなたを、此儘で思ひ切おまへの心が、いかにしてもいとしほい。せめてもの心ゆかし、此間にちやつと抱付なされ」と、むりに押やり庭におり戸口を明、「ホウ旦那様早かつた」彌「何の早かる。百萬べんくだらくと跡の咄しで途方もなふ夜が更けた。アなむあみだく。ヤお若衆はござつたか」岩「サア其お方は」彌「どふじやく」岩「サさつきに見へたけれど、恥しかつたか門口でうぢかはくはいりにくそふにしてど有たを、もどかしがつて娘御がつるはいらしなされたはいな」彌「ヤ、何じや、娘がもうは

ゑいに—よいに

爰やあそこ—間
近き所

かんまへて—注
意して

いらしたか」岩「アイ」彌「なむあみだく」岩「ヲ、旦那様とした事が悪い聞やう。此門口にござつたを内へはいらしなされたといふこつちやはいな」彌「ハテさうしつかりいへばゑいに。どうやら紛はしかつたで、はつと思ふた。どりやお目にかゝるか」とずつと通つて「是はく、嘸お待遠にござりましよ。扱お誂の石塔、今日の約束なりや、夜を日に次いで漸出來し、今朝から若い者等に運ばせたが、大かた建たでござりましよ」岩「それは嬉しや、いかる世話でござつた」彌「イヤ世話は家業じやがお氣に入たらこちも仕合。マア御らふじて下さりませ」岩「成程々々同道して參りたい」彌「そんならお供致しましよ」と、立て用意を取急げば、少「コレく」と様、わしも一所に行たいはいな」彌「そりや何で」少「ハテ石塔の恰好見に」彌「ハテわけもない、何のわれが見る事ぞ。爰やあそこの所じやなし、殊に夜道じや。あほういはすと背戸門しめてよう留守せい。コリヤお岩、そちも傍から隨分氣を付、誰がこふ共かんまへてついはいらすなよ、合點か。サアく「お出」と打連立、急ぎてこそは出て行。月もさやけき夜もすがら、四方の景色もすみのほる、光りを覆ふ雲なからで、雀のやどりかけくらき、松の林に風あれて、汀の波のおのづから音もはけしく打寄せて、高根にひどく山彦は、とうくさつと布引の、瀧のしら糸たへずと人の、とへば

五百崎―云はう
にかく
初利天―三十三
天の一にて通り
にかく

ちつくり云々―
笠石が少し曲つ
て居る

希有な―をかし
な
三惡道―餓鬼
畜生、地獄

かなたと五百崎に、つゞく藪池村里も、急いで初利天上寺、摩耶のお山を右手に見て、行道筋も直ならぬ、脇の濱邊や磯傳ひ、神戸も跡に湊川、流るゝ水の淀ならば、爰も繼橋かけ渡す、舟を守りの神垣や、森もしけみて置露の、垂水の里も早過て、行ば程なく上野山、一の谷にぞ著けるが、しのよめ近き横雲の、たなびく空も青々と、枝葉しけりし松かけに、つゞくり立た御影石、遠目にそれとみだ六が、走寄て「是じやく」。先達て遣はされた所書に合せ、若者等に云付たりや、建はたてたがちつくり笠にふりがある」と、押直してためつすがめつ、「サア恰好見て下さりませ。何とようござりませうがや。是からくるひのない様に、臆を合すは漆喰」と、懷より蓋物取出し、重の際々塗所へ、山畑かせぐ百姓共、鋤鰍かたけどやくと通りかゝつて、「ホウ石屋の親父殿か」彌「おいやいこりや皆とうから精が出るな」甲「イヤこちとらよりこなたがとうからあぢな所へ石塔を建さしやつたの」乙「ハテあの人は商賣じやによつて、どこで有ふが持運んで、建ねばならぬが、誂手が希有なやつじやの」彌「ア、これくむざと龜相言まい。其施主人が爰にござるぞ。ナアお若衆様、我も人も亡者の爲、卒都婆一枚立ても三惡道を遁るゝといふ、まして大そうな此石塔を、お建なさるは御奇特なお若衆様、結構なお志でござ

ざります」耳「イヤこれ親父殿、お若衆の施主人のと、人もないにそりや何いはしやる」

彌「何とはわいら目がさめぬな」耳「アレまだどこに人がゐるぞいの」彌「ハテこれ爰に。ハ

アほんに見へぬは。ハレ面妖な。たつた今迄爰にで有たが、ハアどつちへござつたな。お

若衆様く」と、よべば俱々百姓共、爰かそこかと尋る所へ、娘の小雪がかちはだし、息

もすたく走り付、「お若衆様にたつた一言、いひたい事が有てきた。ちよつと逢して下

さんせ」彌「イヤ逢して所じやない、影も形も見へぬはい」耳「コレ親父殿、お若衆がゐるや

らねば、忽こなたの損じやぞや。所を知てか、但先銀でも取て置しやつたか」彌「いやて

や。仁體が能から所も問す一錢も受取なんだ。ハア夫でよめた。石塔をかこ付に、何ぞ

せしめる下工、扱は街に極つた。遠くはうせまいほつかけん。サア皆こい」と立ち

わけば。小「イヤこれく待しやんせ。よもやそんなさもししい心なお方では有まい。其證

據はわしにやるとて、コレ此笛を」彌「貫ふたのか。ハアどれく、こりやまあ袋が結構

な赤金欄じや。扱笛は生竹でもないが、節からちつくり枝葉が有。いか様是を錢にせう

なら百が物は有ふかい」耳「ナウ親父殿、ハテ扱何の錢にならふ。夫も娘が一ぱいくたの

じや」彌「エ、こんな事ならあたまで半銀取て置いたら、まんざらの損もせまいに。あた

よめた一判つた

さもししい申し

い

あたまで一初手
から

ぬかれた一騙ち
れた

いぢらしー可
愛らし

むごたらしいめにあふた」と、悔にかいもあら笑止や、みだ六がぬかれた、と傳へて諸
事の誂物、手付を取るといふ事は、此時よりと知られたり。時しも跡の松原より、足
早にくる女は、何者なるといふ中に、走り近付藤の局、「コレくちよつと物とはふ。船
寺はどつちじやの。教てたも」と有ければ、彌「ハア、夫は是からよつ程遠いが、見れば
賤しうない女中の、たつた一人かちはだして何故寺を尋さつしやる」彌「さればわらはは
様子有て、跡より追手のかよる者。しばらくかけを隠さん爲」と宣ふ中に目早くも、娘が
持たる袋を見付、「なふそれちよつと見せてたべ」と、手に取給へば紛ひなき青葉の二管。
「ヤア是は我子の敦盛が、肌身はなさぬ祕藏の笛。どふしてこなたの手に有」と聞て親子
も不審顔。百姓共口々に、「其敦盛といふ人は、此間の戦ひに、源氏の侍熊谷の次郎
が手にかより、死しやつたじやないかい。ナア與次郎」與「テ、其時にいぢらしい、玉折
とやらいふ内裏上臈も殺されて居たけな」と、聞て御臺は、「ヤアくくく何敦盛は討れし
とや。福原の館にて母様御無事でおさらばと、玉折諸共いさぎよう、いうたが此世の暇
乞、長い別れに成たか」と、有し事共くどき立、人目も恥ぬさけび泣、前後ふかくに見
へにける。耳イヤこれ親父殿、合點のいかぬ事が有。死しやつた敦盛様があの笛の主な

れば、こなたに石塔せきだふちうら誂へたお若衆わかしゅとひとつじやないか」彌「いかにも」耳みみ「サ其死そのしんだ人が來きそふな物じやないぞや」彌「いかにも」耳みみハ、ア聞へた。さつきに爰迄つれだ連立つてきて、あの物のいふ中うちかきけす様に見へなんだは、扱あつは幽靈いうれいで有たよな」と、いへば皆々興きようさめ顔がほ。御臺みだいは猶なほも悲しさの、思ひいやます御歎おんたひき。小雪こゆきも始終しじうを聞きに付つけ、「はかない事や」と計はかりにて、俱ともに袂たもとをしほりける。折をりふし遙はるかの松まつかけより、むらく鳥とりの羽はうつがごとく、かけくる大勢たいせいみだ六が、「あれこそ慥たしかに追手おつての者。先々まうくあなたを隠かくすに幸さいはひ、此石塔せきだふの後うしろへ」と、御臺みだいの手を取忍とりばせて、彌「何なんと思おもやるいづれも。追手おつてのやつらが此所このところをすなほに通とおればあなたの仕合しあはせ、若もしも何かといぢばらば、是迄へいけ平家の領地りやうちに住すんだ御恩ごおんの爲ため、一働ひとたらきせうじやないか」耳みみ「サ、サてん手に鋤すくの、むね打うちくらはせほいまくろ」と、いふ間もあらせず砂煙すなけぶり、蹴立けだて踏立ふみたてかけくるは、梶原かぢはらが郎等らうどう番場ばんばの忠太ちうた、須股すまた運平うんべい先として、數多あまた引連ひきつつと寄より、「コリヤく百姓ひやくしやう共ども、三十餘あまの女をんな二人、此所このところへきたで有あらふ。どつちへ迄ひたそれぬかせ」彌「ハイ成程なるほどく、其女そのをんなはアレあの道を横切よこぎれに、濱邊はまべ傳つたひに走はしつたが、アアもふ二三里ゆきも行ゆませう。追手おつての衆しゆなら一足あしも早あふござれ」とせかすれば、思おも扱あこそ遁のがすな皆みなこい」と、かけ出だすふりにて立留たちどまり、運平うんべいが耳みみに口くち、しめし合あせてこかけに残のこし、

濱邊をさしてかけり行。跡打ながめ彌「サア樂じや。此間に早ふ」と御臺を出し、「コリヤ
コリヤ娘、あなた一人は覺束ない、寺迄送つて内へいね。ちやつとく」といふ所へ、思
ひがけなき木影より、須股運平飛で出、「ヤアくどこへく。かう有ふと推量し、忠太
が我を残し置れた。サ、早う御臺を渡せ。邪魔ひろぐとかたつばし、そつ首ころり打落
す。何とく」と罵れば、百姓共せよら笑ひ、「コリヤやい、そつ首のそつくいのと、
わいらがうでの動く間に、うつかりとして居よふかい。サア相手仕事じや手早にこい」
と、てん手に鋤鋤大熊手、打てかよれば運平始め、數多の家來も一同に、拔連く渡り
合ふ。打あふ隙にみだ六が、「ソレ御臺様逝た」。娘も逝よ」とあせる中、元來達者の
百姓共、腕先揃へてからざを打、かたはし家來を打なぐり、運平を追取まき、投たり
ふんだりけとばしたり、寄てかよつて打たよく。急所にや當りけん、うんとものつけに反返
れば、「ソリヤ死だは」と逝行家來。又追かくるをみだ六が、「コレく待た」と呼かへし、
「御臺の難義を救ふ爲、ほつちらす計でよいに、ア、死だりや尻がむづかしい。コリヤま
あどふした物であろ」「どふといふたら逝たがよい。サア皆ござれ」といふ所へ、かけつ
てくる庄屋の孫作、死骸見付て、「扱こそく、一人もちらす事ならぬぞや。コレ皆よう

ちよびくさ一ツ
べこべ

聞やれ。今梶原様の郎等番場の忠太といふお侍がござつて、百姓共が狼藉し、家來運平を殺したる由につくいやつ、残らず引立來るべしと、嚴しい云付。ア、ひよんな事しておらに迄、厄介をかける。遅なはつたら猶こはい。サア／＼おじや」といふに皆々尻込の中、にみだ六すゝみ寄、「殺したと聞しやつたは大きな間ちがひ、ありや目がまふて死だじや。其證據にはソレ死骸に一つも疵がない」孫「ムウ夫が定ならおらも嬉しい。ドレ／＼」とからだをあらため、「ほんにどこにも疵はない、こりやあつちのが大きな疵相。ハテそち達が殺さぬからは、何のこはい事はない。此中でよう物いふ者たつた一人いて、さつぱりと云譯すりや濟事じや」彌「ほんにそふじや。ハア誰がよかろなア」亘「いやこれ年の功じや、みだ六いかしやれ」彌「イヤいく分はかまはぬが、おりや口くせの念佛が邪魔に成てどふもならぬ」孫「そんなら此庄屋が指圖せう。日比ちよびくさようしやべる、雀の忠吉やらふかい」忠「イヤわしやあんまり口早で、何のこつちや譯が知まい」孫「扱はびしやの九太衛門かい」九「おりや聲が鼻へ入ぞ」孫「というて丹兵衛は咽がごろつく、與次郎は齒ぬけ也、指詰又平おいきやれ」又「イ、いやコ、こちやド、どもりますはいの」孫「ハテ扱其様に讓合ては埒が明ぬ。幸ひ爰に石を運だ繩が有、是で鬨取したらよ

とれいもよーと
れよ

よんでしたー歌
へて圖を拵へた

かる。ヲ、そりやいやおういはさぬやう、此庄屋がしてくる」と、手早に繩切後でもちやくちやひん握り、「コリヤ結んだのを取た者がいくのじやぞ。サアとれいもよ」「ヲット市かよどれとりやる」「西國廻つて是々」と、てんでに繩先引れば、孫「ハア、あたま數よんでしたが、コリヤ一筋餘つたは」耳「ハテそりや親の繩じや。庄屋殿とらしやれ」孫「ぼんにそふじやおれがとろ。サアひけくかたはしからいなしてくりよ」「ヤすつとせいせい」孫「ハア悲しや結んだのはおれじや有た」耳「サア庄屋殿いかしやれく」孫「イヤ待よ、おりやいかふ筈がない。此場の様子を知てるわいらが云譯する筈じや」耳「デモ圖が當つた物」孫「そんなら最一度」耳「イヤ仕直しはならぬく。むりいはすといかしやれ」と、寄てかよつて引立押立、ヨイヤサツサ「孫、是はめいわく」ヨイヤサツサ「待つてくれんか」ヨイヤサツサ「了簡ならぬか」ヨイヤサツサ「あんまりどうよく」ヨイヤサツサ「おつ立ひつ立、ヨイヤサツサ、てヨイヤサツサ、こヨイヤサツサそ。三重行空も、いつかはさるん須磨の月、平家は八島の浪にたどよひ、源氏は花の盛を見る。中に勝れて熊谷が、陣所は須磨に一構、要害厳しき逆茂木の、中に若木の花盛、八重九重も及びなき、それからあらぬか人ごとに、熊谷櫻といふぞかし。花おらせじとの制札を、讀んで行人讀ぬ人、一つ所に立集り

けはしき―事急
なる

甲「扱も咲たりく。花より見事な此制札、辨慶殿の筆じやけな。さても見事一つも讀ぬ」
乙「ヲ、あれはの、義經様が此花を惜み、一枝きらば指一本切べしとの法度書」丙「ヤア花のかはりに指きるとは首切下地。ヲ、こはや、見てゐる中も虎の尾を踏心地する皆ぞざれ」と、花に嵐の臆病風、ちりふくにこそ別れ行。はるくと尋て爰へ熊谷が、妻の相摸は子と思ひ夫思ひの旅姿、陣屋の軒を爰やかしこと尋しが、幕に覺えの家の紋、嬉しや爰と内に入。折節家の子堤の軍次立出て、「是はく奥様か」相「ヲ、軍次そなたも息災そふな、マアめでたいく。熊谷殿や小次郎もかはる事はないかの。早う逢たい逢せてたも」軍「ハア旦那、今日御廟參、小次郎様は先比より御前勤で御下りなし。マアく長の御旅路、お勞をお休め」と、挨拶とりくなる所へ、敦盛卿の御母藤の局、虎口の難の遁れきて、こけつ轉びつ花のかけ、陣屋をめがけ走付き、「跡より追手のかよる者、かけを隠して給はれ」と、けはしき體に驚きて、相摸は傍へ走寄、見るに見かはす互の顔、相「ヤアお前は藤のお局様ではないか」藤「さういやるそなたは相摸じやないか。テモ久しやなつかしや」相「お床し様や」と手を取て、「マアこなたへ」と伴ひ入、したしき體に心をきかし、軍次は勝手へ入にけり。相摸はやがて手をつかへ、「誠に一昔は夢と申が、大内に御座遊ばす

時、勤番の武士佐竹次郎殿と馴染、御所を拔出東へ下り、お前様のお身の上を承れば、御懷胎のお身ながら平家の御家門、參議經盛様方へ縁づき給ふとの噂、其折は世盛の平家、御威勢はますくと、かけながら悦びましたに、此度源平のたふかひ、御一門もちりぐと聞に付、ア、此藤の方様は何となされたどふ遊ばした、と一人苦にしておりましたに、マア御機嫌なお顔を見て、おめでたやお嬉しや「藤」ヲ、そなたも無事で、マア嬉しい。懷胎で出やつた時の子は、姫ござか男か。息災で育て居るか」と、ちよつと寄ても女同士、問ふつとはれつ年月に、つもの言の葉くりかへし、嬉涙の種ぞかし。藤の方涙ぐみ、「世の盛衰はぜひもなや。其時に産落したは、無官の太夫敦盛辻、器量發明揃ふた子を、今度の軍に討死させ、夫は八島の波に漂ひ、我のみ残るうきなんぎ。浅ましの身の上」とかこち給へば、想「お道理く。以前の御恩も有、連合にも語り、お身の片付後世の營、お心任せに致しませう。以前は佐竹次郎と申て、北面同然の武士、只今にては武藏國の住人、しの黨の旗頭、熊谷の次郎直實と人もしつた侍」と、聞より御臺は「ヤアそなたの連合の佐竹の次郎、今では熊谷の次郎といふか」想「アイ」藤「すりやあの熊谷次郎はそなたの夫よな。ハアはつ」と吐胸の氣をしづめ、「何と相摸、以前大内にて

不義顯はれ、佐竹次郎と諸共に、禁獄させよとの院宣、自が申なだめ御所の御門を、夜の内に落してやつたを覺へてか」相「アツア其時の御恩、何の忘れませうぞいな」藤「ム、其恩を忘れずば、助太刀してそちが夫熊谷を、自に討してたも」相「エ、イそりや又何のお恨で」藤「サア最前も咄した、院の御所のお胤、無官の太夫敦盛を、そちが夫熊谷が討たはいの」相「エ、そりやまあ誠にござりまするか」藤「スリヤそなたは何にもしらぬか」相「サアはるゝと東より、今来て今の物語、聞いてとむねの誠しからず、追付夫が歸り次第、様子を尋る其間、暫くお扣へ下され」と、詞を盡し理を盡し、なだむる折に表より、「梶原平次景高、所用有て推参」と呼はる聲。相「ヤア何梶原とや。見付られては御身の大事。先々こちへ」と御臺の手を取、一間へ伴ふ其中に、堤の軍次立出、「今日は主人直實、志有て廟参。御用あらば、某に仰置れ下され」と、地に鼻付れば平次景高、「何熊谷殿は他行とな。ソレ家來共、其石屋の親父め引立來れ」「はつ」と答へて科もなき、白毫のみだ六を、平次が前に引居ゆれば、景「ヤイなまくら親父め。己何者に頼れ、敦盛が石塔は建てたやい。平家は残らず西海へほつくだし、誂ゆべき相手なければ、察する所、源氏方の二股武士が、頼みしに違ひは有まい。サア眞直に白狀ひろけ。偽ると鉛の熱湯、脊骨を

なまくら親父
鈍物の親父

五りん云々―當時の石塔は地水火風の五輪に重ねたるもの夫を錢五厘一厘にかく
そんしやうぼだい損にかく頼生菩提をもざる願以此功德云々―讀經の終りに讀む文句なれば話の終りにきかず
三ツ鐵輪―一人を證にとつて三人にて論じ定むる(假言集覽)

わつて流し込こめと、おどしかけても正直一遍、テモ扱も御無理な御詮議。先程も申した通り、石塔の誂人は敦盛の幽靈。五りんの事は扱置、一りんも手附はとらず、建ると其儘石塔の喰込。せめて人魂でも手附に受たら、小挑燈の代りに致ませうに、冥土へ書出しはやられず、本の是がそんしやうほだい。有やうの申上、願以此功德施一切、此通りでござりまする」と取しめなき。「ア、何おつしやつても糠に釘」と、軍次が詞に平次は悪智恵、「大かた石塔を建させたわろも合點々々。熊谷戻らば三ツ鐵輪の詮議。先そやつめを引立來れ」と、一間へ入ば家來共、石屋の親父をむりやりに、引立奥へ連て行、相摸は障子押ひらき、日も早西に傾きしに、夫の歸りの遅さよと、待間程なく熊谷の次郎直實、花の盛の敦盛を、討て無常を悟りしか、遺に猛き武士も、物の哀を今ぞしる、思ひを胸に立歸り、妻の相摸を尻目にかけて座に直れば、軍次はやがて覆になり、「先達て平次景高殿、何か詮議の筋有とて、御影の石屋を引連御出有、奥の一間に御待ち」と委細を述べ、直、ムウ詮議とは何事ならん。アいや其方は一獻を催し、梶原殿を饗し申せ。サア早くいけ。ハテ扱何を猶豫する」と、呵りちらされ是非なくも、相摸に顔を見合して、心を残し入にけり。跡見送りて熊谷は、「コリヤ女房、其方は爰へ何しに來た。

國元出立の節、陣中へは便も無用と、堅く云付置たるに、詞を背くといひ剩へ、女の身で陣中へ来る事、不届至極の女め」と、不興の體に相摸はもぢく、「其お呵を存じながら、どふかかうかと案じるは小次郎が初陣。一里いたら様子がしれうか、五里來たら便があるかと、七里歩み十里歩み、百里餘りの道をつる都迄。ホ、ヲ、しんき。登つて聞けば一の谷とやらで、今合戦の最中と、取々の噂ゆへ、子に引されるは親の因果、御了簡下さりませ。マア此小次郎は息災で居ますか」と、問へば熊谷詞をあらよけ、「戰場へ赴くからは命はなき物、堅固を尋る未練な性根、若討死したら何とする」想いとゑいな、小次郎が初陣に、よき大將と引組で討死でも致したら、嬉しい事でござんしよ」と、夫の心に随ひし、健氣な詞に顔色直し、眞ホ、先小次郎の手柄といふは、平山の武者所と爭ひ、拔がけの高名、軍門にかけ入ての働、手疵少々負ふたれ共、末代迄家の譽」想エ、して其手疵は、急所ではござりませぬか」眞ソレまだ手疵を悔む顔付、若急所なら悲しいか」想イヤ何のいな、かすり疵でも負程の働は、出かしたと思ふて嬉しさの餘りお尋。其時お前も小次郎と、一所にお出さなれたか」眞ホウ危しと見るより軍門にかけ入、小次郎をむりに引立小脇にひんだき、我陣屋へ連歸り、某は其軍の搦手の大將、無官の太

聊爾一粗忽

年はも行ぬ一年
も行かぬに同じ
は字無用と難波
土産にあり

夫敦盛の首取たり」と、咄に扱はと驚く相摸、後に聞るる御臺所「我子の敵」と有あふ
刀、「熊谷やらぬ」と拔所、鑑鑑んで、直「ヤア敵呼はり何やつ」と、引寄るを女房取付、
「ア、これく聊爾なされな、あなたは藤の御局様」と、聞いて直實悔し、「ハア思ひが
けなき御對面」と、飛退敬ひ奉れば、驢コリヤ熊谷、軍のならひとは云ひながら、年は
も行ぬ若武者を、ようむごたらしう首討たな。サア約束じや相摸、助太刀して夫を討せ。
何とく」と刀追取せり付給へば、想「アイあい」と返事も胸にせまりながら、「エ、
直實殿、敦盛様は院のお胤としりながら、どふ心得て討しやんした。様子が有ふ其譯を」
と、いふもせつなきうろく涙、直「ア、おろかく。此度の戦ひ敵と口ざすは安徳天皇。
夫に随ふ平家の一門、敦盛は扱置、誰彼と鎬を削るに用捨がならふか。イヤナウ藤の御
方、戦場の義は是非なしと、御諦め下さるべし。其日の軍のあらましと、敦盛卿を討た
る次第、物語らん」と座を構へ、「扱も去ぬる六日の夜、早東雲と明る比、一二を争ひ拔
かけの、平山熊谷討取れと、切て出たる平家の軍勢、中に一際勝れし緋威、さしもの平
山あしらひ兼、濱邊をさして逸出す。ハテ健氣なる若武者や、逸る敵に目なかけそ、熊
谷是に扣へたり、返せ戻せ、チ、イおいと、扇を持て打招けば、駒の頭を立直し、波の

いざよふ云々
十六才にて小次郎と同年

よるふた一甲冑
をつけた

打物二打三打、いでや組んと馬上ながらむんづと組み、兩馬が間にどうど落ち「藤」ヤア
 ヤア何と其若武者を組敷てか「直」されば御顔をよく見奉れば、かね黒々と細眉に、年は
 いざよふ我子の年ばい。定て二親ましきさん、其歎はいか計、と子を持たる身の思の餘
 り、上帶取て引立塵打はらひ、早落給へと「相」すよめさしやんしたか。そんなら討奉
 るお心ではなかつたの「直」チ、早落給へとすよむれど、イヤ一旦敵に組しかれ、何面目
 にながらへん、早首取よ熊谷「藤」ナニ首取といふたかいの。健氣な事をいふたなふ「直」サ
 ア其仰にいとど猶、涙は胸にせき上し、まつ此通りに我子の小次郎、敵に組れて命や捨
 ん、あさましきは武士の、ならひと太刀も抜け兼しに、逃去つたる平山が、後の山より
 聲高く、熊谷こそ敦盛を組敷ながら、助るは二心に極りし、と呼はる聲々。エ、是非も
 なや、仰置るゝ事あらば、言傳へ参らせん、と申上れば、御涙をうかめ給ひ、「父は、
 波濤へ赴き給ひ、心にかゝるは母人の御事、きのふにかはる雲井の空、定なき世の中を、
 いかど過行給ふらん、みらいの迷ひは一つ、熊谷頼むの御一言。是非に及ばず御首を」
 と咄す中より藤の局、「ナフ左程母をば思ふなら、經盛殿の詞に付、なぜ都へは身を隠さ
 ず、一の谷へは向ひしぞ。健氣によろふた其時は、母も俱々悦んで、すよめてやりしか

入相―入るにか

歌口―笛の吹く
穴
はだし―羅絳

はいやな。覺悟の上も今さらに、胸もせまりて悲しや」と、くどき歎かせ給ふにぞ、御尤とは思へ共、相摸は態と聲はけまし、「イヤ申お局様、御一門残らず八島の浦へ落行給ふ中に、一人踏とどまり、討死なされた敦盛様、數萬騎に勝れた高名。但辻のび身を隠し、人の笑ひを受給ふが、おまへの氣では嬉しいか。御末練な御卑怯な」と、いさめに熊谷、「ヲ、でかしたく。コリヤ女房、御臺所此所に御座有てはお爲にならぬ、片時も早く何方へも御供せよ。サアく早くいけく。我も敦盛の御首實檢に供へん。軍次はおらぬか早參れ」と、呼はる聲と諸共に、一間へこそは入相の、鐘は無常の時を打、陣屋陣屋の灯火に、いとど悲しさ藤の方、「ア、思ひ出せばふびんやな。今はの際迄も肌身はなさず持たるは、コレ此青葉の笛、我と我身の石塔を建て貰ふた價にと、渡し置た此笛の、我手に入しも親子の縁、魂魄此世に有ならば、なぜ母にはま見へぬぞ、聞へぬ我子やなつかしの此笛や」と、肌身に添へて、盡せぬ思ひやるせなき。想コレ申其笛がよいおん筐、經だらにより笛の音を、手向るが直に追善。敦盛様のお聲をば、聞と思ふて遊ばせ」と、すよめに隨ひ藤の方、涙にしめす歌口も、ふるふて音をぞすましける。親子の縁の絆にや、障子にうつるかけらふの、姿は慥敦盛卿。藤の局は一目見るより、

香の煙云々一匹
の武帝反魂香に
て故李夫人を見
し故事

實方一藤原實方
一條帝の勳氣を
受け陸奥に流さ
れ死しても都の
戀ひしきに姿を
顯す

「ヤレなつかしの我子や」と、かけ寄給ふを相摸は抱とめ、「香の煙に姿を顯はし、實方は死て再び都へ歸りしも一念のなす所。有まい事にはあらね共、いぶかしき障子のかげ。殊に親子は一世と申せば、御對面遊ばさば、御姿は消失ん」藤「イヤなふ四十九日が其間、魂中有に迷ふと聞。せめては逢ふて一言を」と、ふりはなし、障子ぐはらりと明給へば、姿は見へず緋威の、鎧計ぞ残りける。はつと計に藤の方、相摸も俱に取付て、二人「扱は鐙のかけなるか。戀しと迷ふ心から、お姿と見へけるか」と、俱にこがれて正體も、泣きくどくこそ哀なれ。時刻移ると次郎直實、首桶携へ立出れば、相摸は夫の袂を扣へ、「コレ申是が親子御一生のお別れ。せめて御首になり共、御暇乞を」と願ふにぞ、藤の局も涙ながら、「ナフ熊谷、そちも子の有身でないか。野山の猛き獸さへ、子を悲しまぬはなき物を。親の思ひを辨へて、情に一目見せてたも」と、縋り歎かせ給へ共、直「イヤ實檢に備へぬ中内見は叶はぬ」と、はね退け突退け行く所に、「ヤア熊谷暫し暫し。敦盛の首持參に及ばず、義經是にて見やうするは」と、一間をさつと押ひらき、立出給ふ御大將、「ハ、、、はつ」と次郎直實、思ひ寄らねば女房も、藤の局も諸共に、あきれながらに平伏す。義經席に著給ひ、「ヤア直實、首實檢延引といひ、軍中にて暇を

息の根とめ―語
ちせず
はしたなう―不
謹愼

南面の嫩―南面
は帝王をさす嫩
は幼君敦盛をい
ふ此本の表題は
是をとる
一指を切べし―
一指を一子小次
郎にかけていふ

願ふ汝が心底いぶかしく、密に來りて最前より、始終の様子は奥にて聞く。急ぎ敦盛の首實檢せん」と、仰を聞より熊谷は、「はつ」と答へ走り出、若木の櫻に立置し、制札引抜き恐れなく、義經の御前に指置、「先頃堀川の御所にて、六彌太には忠度の陣所へ向へと花に短冊、此熊谷には敦盛の首取よとて、辨慶執筆の此制札。則、札の面のごとく御誕に任せ、敦盛の首討取たり。御實檢下さるべし」と蓋を取ば、「ヤア其首は」とかけ寄る女房、引寄て息の根とめ、御臺は我子と心も空、立より給へば首を覆ひ、直コレ申實檢に備へし後は、お目にかける此首、おさはぎ有な」と熊谷が、いさめに遣はしたなう、寄るも寄られず悲しさの、ちどに碎くる物思ひ。次郎直實謹んで、「敦盛卿は院の御胤、此花江南の所無は、則南面の嫩、一枝をきらば一指を切べし、花によそへし制札の面、察し申て討たる此首。御賢慮に叶ひしか、但直實過りしか。御批判いかに」と言上す。義經欣然と實檢まし、く、「ホ、花を惜む義經が心を察し、アよくも討たりな。敦盛に紛れなき其首、ソレ由縁の人も有べし。見せて名残を惜ませよ」と、仰を聞より、直コリヤ女房、敦盛の御首、藤の方へお目につけよ」と想「アイあい」と計女房は、あへなき首を手に取上、見るに涙にふさがりて、かはる我子の死顔に、胸はせき上身もふるはれ、持

たる首のゆるぐのを、うなづくやうに思はれて、門出の時にふり返り、につこと笑ふた面ざしが、有ると思へば可愛さふびんさ。聲さへ咽につまらせて、「申藤の方様御歎有た敦盛様の此首」藤「ヒヤア是は」想「サイナアフ申、これよう御らん遊して、お恨はらしよい首じやと、響めておやりなされて下さりませ。申此首はな、私がお館で、熊谷殿と忍び逢、懐胎ながら東へ下り、産落したは、ナコレナ、此敦盛様、其節おまへも御懐胎、誕生有し其お子が、無官の太夫様。兩方ながらおなかに持、國を隔て十六年、音信不通の主従が、お役に立たも因縁かや。せめて最後は潔う、死なされたか」と怨けに、とへど夫は瞬も、せん方涙御前を恐れ、餘所にいひなす詞さへ、泣音血を吐く思ひなり。藤の局は御聲曇り、「ナフ相摸、今の今迄我子ぞ、と思ひの外な熊谷の情、そなたは嘸や悲しかろ。かうした事とは露しらず、敵を取ふの切ふのと、いうた詞が恥しい。我子の爲には命の親、忝いと手を合せ、「此首の生世の中、逢見ぬ事の悔しや」と、俱に歎かせ給ひしが、「是に付いぶかしきは此濱の石塔、敦盛の幽霊が建てさせたとの噂といひ、祕藏せし青葉の笛、石屋の娘が貰ひし連我手に入、最前其笛吹いた時、あの障子に移りしかけは、慥に我子と思ひしが、詞もかはさず消失しは」義「アいや其笛の音を聞てかけ

障子ごし云々―
義經が敦盛を障
子の陰に隠し
なり
籬木の云々―
原や伏屋に生
る籬木のありと
は見えて云々の
歌による

こつば―木片に
て無用物の梶原
をさす

隠れのない―原
本の字なし

嬉しさ―原本嬉
しき

出し敦盛の幽霊、人目有と引とどめ、障子ごしの面かけは、義經が志」と、聞いて御
臺は我子の無事、悟りながらも籬木の、有とは見へて隔られ、又も涙にくれ給ふ。折節
風に誘はれて、耳を突ぬく螺貝の、音かまびすく聞ゆれば、義經はいさみ立、「ヤアく
熊谷、著到知せの螺の音。出陣の用意々々」と、仰に直實畏り、急ぎ一間に入にけり。
最前より様子を聞居る梶原平次、一間の内より踊り出、「斯あらんと思ひし故、石屋めを
詮議に事よせ窺ふ所、義經熊谷心を合せ、敦盛を助し段々鎌倉へ注進」と、云捨て出
す後より、はつしと打たる手裏劔は、骨を貫く鋼鐵の石鑿、轟うん」と計に息絶る。「ス
ハ何者」といふ中に、立出る石屋の親父、「ハ、アお前方の邪魔に成る、こつばを捨て上
けました。扱幽霊の御講釋、承つて先安堵、もうお暇」と立行くを、「ヤア待て親父、
コリヤ彌平兵衛宗清待て」と、義經の詞に恠り、はつと思へどそらさぬ顔、「ハレやれ
やれとつけもない。御影の里に隠れのない白毫のみだ六といふ男でゐす」義「ハ、ハ、誠
や諺にも、至て憎いと悲しいと嬉しいとの此三つは、人間一生忘れずといふ。其昔母常
盤の懷に抱かれ、伏見の里にて雪に凍へしを、汝が情を以て親子四人が助りし嬉しさ。
其時は我三歳なれ共、面影は目先に残り、見覺有眉間のほくろ、隠してもかくされまじ。

老子―周の老聃
にて母の胎内に
あること八十年
生れて頭髮白し

獅子身中の虫―
仁王經の句

重盛卒去の後しげちりぞつぎよは、行方知ずと聞きこしが、ハテ堅固けんこで居ゐたな満足まんぞくや」と、聞きこよりみだ六つつかと立寄たちより、義經よしつねの顔穴かほあなの明あほど打うちながめ、「テモ恐おそしい眼力がんりきじやよなア。老子らうしは生うれながらにささとく、莊子さうしは三つにして人相じんさうをしきると聞きこしが、かく彌平兵衛宗清やへいびやうゑいねきよと見みられた上うへは。エ、義經殿よしつねどの、其時そのときになたを見通みとさずは、今平家の楯籠たてこもる鐵柵てつかいが峰みね、鶴越ひさよりこえを責落せめおす大將しやうは有あるまい物。又池殿いけどのと云合いひあせ、賴朝よりともを助たすけずは、平家は今に榮さかん物。エ、宗清むねきよが一生しやうの不覺ふかく。是に付つけても小松殿御臨終こまつどのごりんじうの折ひがから、平家の運命うんのい未危すゐあやふし、汝武門なんぶもんを遁のがれ身を隠かくし、一門もんの跡弔あとさげへと、唐土育王山もろこしいわうざんへ祠堂金いづはと偽いつはり、三千兩の黃金りやうわうこんと、忘篋わすれがたみの姫君ひめぎみ一人預にんあづかり、御影みかげの里みしりへ身退みしりぞき、平家の一門先立もんさきだち給おんかたふ御方々おんかた々の石碑せきひ、播州一國はんとしう那智高野なちかうや、近國他國きんごくたごくに建置たておきし、施主せしゆの知ぬ石塔せきたふは、皆是彌平兵衛宗清やへいびやうゑいねきよが、涙なみだの種たねと御存ごぞんじしらずや。今度敦盛こんどかつもりの石塔せきたふ、誰たれに見みへし時も、御幼少ごえうせうにて御別申おわかれまうせし故ゆゑ、御顔おかほは見覺みおぼえ共、心得こころえぬ風俗ふうぞくは、ヒヤ世しのを忍しのぶ平家の御公達ごきんだちならんと思おもふより、心能こころよく受合うけあひしが、扱いは命いのちにかはりし小次郎こじらうがほだいの爲ため、此濱このはまの石塔せきたふは敦盛あつもりの志こころざしにて有あけるか。ヘツエいかに天命てんめい歸きすれば迎むかひ、我われ助けし賴朝義經よりともよしつね、此兩人このりやうにんの軍配ぐんはいにて、平家の一門御公達もんごきんだち一時ときに亡ほろぶるとは。ハア、是非しぜいもなき運命うんのいやな。平家の爲ために獅子身中の虫ししんちゆうのむしとは我事わがこと。噯御一門陪臣もんはいしんの魂魄こんぱく、我われを恨うらみ淺あま

大あちめー鎧の
札の荒く舐した
ものにて重し

筋は―下にない
の二字を入れて
見るべし

しや」と、或は悔み或は怒り、涙は瀧を争へり。元來さとき大將義經、「ヤア／＼熊谷障子の内の鎧櫃、ソレこなたへ」眞はつ」と答へて次郎直實、出陣の立出と、好む所の大あらめ、鍬形の兜を著し、抱出でたる鎧櫃、御目通りに直し置。義「コリヤ親父、其方が大切に育る娘へ、此鎧櫃届てくれよ。コリヤ彌陀六」宗「ヤアみだ六とは」義「フウ宗清なれば平家の餘類、源氏の太將が頼むべき筋は」宗「ム、面白い。みだ六め頼まれて進ぜましよ。したが娘へは不相應な下され物、マア内は何でござります、改めて見ませう」と、蓋押明れば敦盛卿。「ナウなつかしや」と藤の方、かけ寄り給へば蓋ぴつしやり。宗「ヤア此内には何にもない。ヲ、何もない／＼。ホ、是でちつと虫が納まつた。ナウ直實、貴殿への御禮は、コレ／＼此制札、一枝をきらば一子を切て、ヘツエ忝い」と、いふに相摸は夫に向ひ、「我子の死んだも忠義と聞ば、もふあきらめて居ながらも、源平と別れし中、どふしてまあ敦盛様と、小次郎を取かへやうが」眞「ハテ最前も咄した通、手負と偽り、無理に小脇にひつばさみ、連歸つたが敦盛卿。又平山を追かけ出たを、呼かへして首討たのが小次郎さ。知れた事を」と失なる、咄に相摸はむせび入、「エ、どうよくな熊谷殿、こなた一人の子かいなふ。逢う／＼と楽しんで、百里二百里きた物を、と

もぎどふー無慈
悲

望は下になし
の二字を省けり

九品蓮臺極樂
の蓮華のうてな

終一殿めしき直
實の顔に譬ふ

れんじやく連着
にて鎖の括紐

つくりと譯わけもいはず、首討くびうつたのが小次郎こじらうさ、しれた事を、ともぎだうに、しかる計はかりが手
がらでも、ござんすまい」と聲を上げ、泣なきくどくこそ道理なれ。心を汲くんで御大將おんたいしやう、い
さみを付つけんと、「ヤアく熊谷くまがへ、西國出陣さいこくしゆつぜん時移る、用意よういいかに」と仰おほせに直實なほざね、「恐おそれながら先
達だつて、願ねがひ上し暇あけの一件いつけん、かくの通り」と兜かぶとを取とげ、切拂きりはらふたる有髪うはつの僧そう、義經よしねも感心かんしん
有あり、「ホ、さも有なん。それ武士もゝとふの高名譽かうみやうを望ほむも、子孫しそんに傳つたへん家の面目めんぼく。其傳つたふべき
子を先立さきだて、軍に立たん望のぞみ。ホウ尤もつとも。コリヤ熊谷くまがへ、願ねがひに任せ暇いさまを得えさするぞよ。汝なんぢ堅固けんこに
出家しゆつをとけ、父義朝よしともや母常盤とこはなの回向くわうも頼たのむ」としたしき御説ごせつ。直ちハ、ア有ありがたし」と立
上あり、上帶うはびを引ひくとき、鎧よろひをぬけば袈裟けさ白無垢しろむく。相摸さがみ「是は」と取付つくを、直ちヤア何驚なにおどろく女房にようばう。
大將たいしやうの御情おんなさけにて、軍半いくさなかはに願ねがひの通り、御暇おんいさまを給たまはりし我本懷わがほんくわい。熊谷くまがへが向むかふは西方さいほう彌陀だ
の國くに、憐せがれ小次郎こじらうが拔ぬけがけしたる九品蓮臺くほんれんたい。一つ蓮はすの縁えんを結び、今より我名われなも蓮生れんじやうと改め
ん。一念ねん彌陀佛だぶつ即滅あつそくめつ無量むりやう罪ざい。十六年じゅうろくねんも一むかし。ア夢ゆめで有あつたなあ」と、ほろりとこぼす
涙なみだの露つゆ、終つゆに置おく初雪はつゆきの、日ひかけにとける風情ふぜいなり。「チ、そふじやく。我子わいしの罪障ざいしやう消
滅めつの、加勢かせいは是こゝと切きつたる黒髪くろかみ。詞ことばはなくて御大將おんたいしやう、藤つばねの局つばねも諸共しよどもに、御涙おんなみだにぞくれ給ふ。
「長居ながゐは無益むやく」と彌陀六みだは、鐙櫃ようびつにれんじやくを、かけた思案しあんのしめくより、宗しゆん「コレく

不隨者—妻子珍
寶及王位臨命終
時不隨者—大集
經

こがねざね—金
札

コレ義經殿、若又敦盛生返り、平家の殘黨かりあつめ、恩を仇にて返さばいかに」義「ヲ夫こそは義經や、兄頼朝が助りて、仇を報いし其ごとく、天運次第恨を請ん」直「けに其時は此熊谷、浮世を捨て不隨者と、源平兩家に由緒はなし、互にあらそふ修羅道の、苦患を助ける回向の役」宗「此彌陀六は折を得て、又宗清と心の還俗」直「我は心も墨染に、黒谷の法然を師と頼み、教を請けんいざさらば、君にも益々御安泰、お暇申」と夫婦づれ、石屋は藤の御局を、伴ひ出る陣屋の軒「御縁が有らば」と女同士、「命があらば」と男同士、「堅固で暮せ」の御上意に、有がた涙名残の涙、又思ひ出す小次郎が、首を手づから御大將、此須磨寺に取納め、末世末代敦盛と、其名は朽ぬこがねざね、武藏坊が制札も、花を惜めど花よりも、惜む子を捨て武士を捨て、すみ所さへ定めなき、有爲轉變の世の中や、と互に見合す顔と顔、さらばくおさらばの、聲も涙にかきくもり、わかれてこそは出て行。

第四

道行花の追風

菊の前―聞くに
かく
心細布云々―陸
奥の陝布の里に
て出す幅狭き布
をよせたり
うばらの里―姥
にかく
玉ほこ―道
しら浪の云々―
知らぬにかく、
武庫川昆野のは
攝津にあり
ふしみ―添寐と
伏見
近江路―逢ふに
かく
つまさきあがり
―聊かの上り道
にはの浦―琵琶

磯千鳥、いく夜寝ざめの物あんじ、二世とかねたるたどのりは、はかなくうたれ給ふ共、
又鎌倉へとははれ共、噂とりく、菊の前、心細布胸あはず、けふ立そむる旅衣、きつゝ
なじみをかさねつる、やしなひ君とかしづきの、老女ひとりをつゑはしら、名は有なが
ら呼なれし、うばらの里を出こして、あづまの空へと思ひ立、心の内こそはるかなれ。
足よわづれの玉ほこに、末しら浪のむこ川や、昆陽のの池にすむ月も、心はくもる片袖
の、其移り香も筐かと、思ひぞつもる芥川、いつかふしみも跡になし、殿御にやがて近
江路と、見へ渡りたる風景も、心せかれて行道は、つまさきあがり小石はら、老女は足
をいたはりて、「申々お姫様、行先遠き旅の空、御身の勞も出やせん。マアしばらく」と
道芝に、立やすらへば菊の前、「チ、みづからが氣のせく儘、跡先見ずに道を急ぎ、年寄
たそなたの難義、足が痛みはせぬかや」と、鉢ク、キ互にとふつとはれつる、しんみなじみ
の底ふかき、にはの浦なみ山々も、しけりし峯は八わうじ、いそべに見ゆる唐崎の、松
は扇のかなめとや。「あれこそしがの山ごゑの、よき詠ぞ」と教ゆれば、菊の前打ながめ、
「ナフしがの山とはあれ成か。なつかしや忠度様の御詠歌を、千載集へ父上が、撰み入
給へ共、勅勘の御身をはどかり、讀人しれずと末の世迄、御名を削しほいなさを、御歎

關—伊勢の地名
せくにかく
かきりまきこ
さしかくるにか
くかきりは關朝
の庭の四隅にあ
る楓、柳、松、櫻を
いふ關朝の縁に
毬子の地名をよ
せたり
富士のけぶり—
風に靡くふじの
烟の空に消えて
行方も知らぬ我
思ひかな（新古今集）
わやく—冗戲
したかひ云々—
内襟、袴と従ひ
夫にかく
大いそ—逢ふに
かく

の涙にて濡し筐の片袖は、忍びあふ夜の添臥も、冷泉君は左か寐がつてに、打きせ給ひし口ずさみ、而影のかすめる月ぞやどりける、はるや昔の袖の涙に。袖の涙や有し夜の、ぬしは雲井に隔りて、昔語りと成給はど、此身の果はいかならん」と、歎に草の露ぞうく。おなじ思ひを押かくし、老女は力つく杖に、道をたすけて行さきを、たぐり寄なん布引山、心も關の別より、伊勢やおはりの海づらに、立波を見ていとどしく、過にしかたは遠ざかり、しらぬ山々里々に、日をかさね夜をかさね、ほつれし鬘に風いとふ、濱松過ぎて山坂に、かきりまりこやおきつなみ、富士のけぶりの立のほり、行方もしらぬ旅人の、姫ごぜ連と惡口に、歌君と添ねにともしびよせて、かよけて見ればそふだかく。いとばつかしや。けせばいとお顔が見へぬ、是ぞ誠に戀のやみ。そふいふたがむりかへ。いとばつかしや。けせばいとお顔が見へぬ、是ぞまことに戀のやみ。そふいふたがむりかへ。むりもわやくもしたがひの、つまにふたたび大いそと、心計はいそがれて、足はもつるよ藤澤や、系にしの便りほし月夜。かまくらにこそ三重著にけれ。榮へぬる平家の一門悉、西海の波に亡び、再び榮る源氏の御代、猶長久の御祈願と、鶴が岡の八幡宮、新に造營有ければ、日々に威を増神詣賑はふ空も長閑なる。向ふの方よ

りのつさく、供人引連れ醒井兵太、「ヤア家來共、道々もいふ通り、主君頼朝公より、平家の餘類は根を斷て葉を枯せとの仰によつて、隠れ忍ぶ殘黨を取縛る身が役目。隨分四方に眼をくばり、うさんな者と見るならば、男女に限らず搦めとれ。手柄はそち達はうびは某、急度申渡した」と、家來はいくくも仰山に、社深くぞ入りにける。跡に社參の一むれは、徒士の附々も、一際自立旅乗物、松かけに昇すへて、「是は鶴が岡八幡宮と申まして、源氏の御代を守りの御神。御拜がてらに風景も、御覽なされて然るべう、存まする」と、頭をさぐれば乗物より、武士にはあらぬ風俗は、九條の町に全盛を、菅原といふ太夫職、「是はく今都では口利の牽頭様、喜六様宗助様などといふて、大がいあまい客様達は、水銀なしにてんくからく、天上さするからくりの名人様達、それを供の侍にして、ほんにマアかはつた趣向ではないかいなア。かう打揃ふていたらば、主はきつい機嫌である。そしてふ六彌太様の屋敷は、爰からはつい近いけな。三年ぶりで顔見よふかと、わしや飛立つやうに思ふてゐるはいなア」供「いか様是は御尤。此喜六宗助は日比旦那のお氣に入、お供をするもお馴染だけ。是からおまへは大名の奥様。訛りちらす女中の中へ、チ、しんきわしやいやいな、と今迄のせりふでは、マアぶたい

菅原—寫るにか
水銀なしに云々
—水銀は手品師
の種

いかさま—成程

チ、しんき云々
—斯る里詞にて
はつりあはぬ

路考慶子―潮川
路考中村慶子の
づれも女形の名
人

こんたん―魂胆
工夫して

地黄丸―精を増
す薬

粹方
御

はきく―はばき
き

つきが濟みませぬ。高が旦那は幕の内、御一門のお付合などは路考慶子で雲上に、萬事
そこらはちよんの間で、お付合なされませ」と、餘所へ通ぜぬ教の詞、しつた同士こそ
すどしけれ。葦そこらはわしがこんたんしてるる。帶の仕様も此形も、藏屋敷の振舞で、
よう見て置いた屋敷の風俗。遁す物じやないはいな」供「おつとよし」。それはそふじ
やが、久しぶりのお寐間の段、御勞の出ぬ様に、地黄丸でもあがつて。したが必ず薬酒
は御無用」と、咄し半へ、家來引連醒井兵太、「ヤア鎌倉に見馴ぬ女の風俗、都者に極つ
た。平家の餘類も疑はしい、連歸つて吟味する。ソレ引立」と立かゝれば、傍に二人
の牽頭はわなく、「都者とは御すいほう。したがお尋なされます、平家とやらかつくと
やら、微塵も覺へはござりませぬ」兵ヤア偽るまい。武士に似合ぬがちくと震ふ
は曲者。ソレくゝれ」と二人を投付蹴飛ばせば、物に馴れたる菅原は、騒ぬ色目しとやか
に、「イヤこれ聊爾さんすなお侍、自は岡部の六彌多忠澄が女房」と、聞よりも醒井
兵太、「スリヤおまへ様には六彌太殿の御内證とな。是はく存ぜぬ事連慮外千萬。拙者
義は則六彌太殿の下目付。イヤモウ何が物でござります、當時はきよの六彌太殿へ、か
ういふ事が聞へては。何さく、とにかく是は家來共が龜相。ハテ不調法千萬」と、ま

醒井—覺めるに
かく
林—離しにかく

じめになれば二人の牽頭、「醒井兵太頭が高い」兵「ハア」壁「まちつと高い」「ハアく」と、家來も一度に眞倒、額を土にすり付る。其間に菅原目まぜでしらせ、乗物上させ足早に、引添てこそ急ぎ行。跡には一度に顔を上、「是はしたり夢ではないかや」「サ夢ぢやによつて醒井兵太。皆こいく」と打連て、松かけにこそ走行。跡へしとく二人連、花や楓と見し夫の、便を何と菊の前、詞の林打連て、あてども波のかけ遠き、宮居を暫し伏をかみ、菊「何とマア林、此様にうかくとさまよふも、忠度様のお顔が見たさ。須磨の軍の亂れより、どふ成なされた事じややら。此中は打つとき夢見の惡さ。わしやいかふ氣にかゝるはいの」林「お道理く。そりや此乳母も同じ事。以前の夫は平家の侍兄と妹と二人の子の親。様子有て退去した、かはいけもない夫さへ、思ひ出すが女のならひ。娘は都に勤奉公。兄太五平も軍に出ると云ひましたが、どふ成おつた事じややら。おまへも私も思ひ出す事計で、夜がなよつぴと泣くらす、長の旅路の御氣休め、ちと床几へ」とすよめられ、涙交りの身の上咄し。竝木のかけに誰やらん、深編笠の浪人姿、後の方には醒井兵太、様子立聞家來共、「ソレ搦よ」と追取まく。林は姫を後にかこひ、「ヤア聊爾せまいぞ。我々は八幡様へ參詣の者、何故に搦よとは」兵「ヤアぬかすまい。聞

た所が忠度の妻菊の前、平家の餘類遁れぬ所」と林を引退け、姫君に飛かよるを、林な
ふコレ待て」と、とむるを蹴倒し、泣叫ぶ菊の前をひんだかへ、既に危き折からに、深編
笠の侍が、兵太が利腕ぐつと捻上げ蹴飛ばせば、兵アイタ、ヤア爰なあみ笠め。大切
な科人を召捕役目の妨ひろぐ。先汝から詮議有やつ。くよれよたよけ」と立かよれば、
物をもいはず雑兵を、宙に擲て天狗の礫、はらりくと投飛ばせば、兵命が大事じや家來
共、皆こい」と云捨て、逸散にこそ逃て行。跡に二人は胸押なで、其是はくどな
たかは存ませぬが、危い所へおかけ故。コレおまへもお禮おつしやれ」と、姫君俱々嬉
し泣、手を合すれば、侍ア、これく、お禮には及ばぬ嘸御難義。シテ承れば女中に
は、忠度殿に縁の有菊の前とな」菊ア、いや左様では」侍ハテお隠しなされな、とつくと
様子承つた。おいとしや忠度卿には、早御果なされたはいの」菊エ、そりやほんか。シ
テく様子は。御存ならば聞してたべ」と、そぞろ涙のふるひ聲。侍チ、恠りはお道理
お道理。さいつ比すまの浦の合戦に、岡部の六彌太忠澄に渡り合、右の腕を打落され、つ
るにあへなく御さいごと、慥に世間の取沙汰。拙者京都の者なれば、兼々和歌の名人と、
聞及んだ忠度卿。お咄し申も他生の縁」と、聞内よりも姫君は、「こは何とせんおいとし

しどけなうては
一掃がなくては

や。跡に残りて自は、何樂しみにながらへん。なむあみだ佛」と懷劍にて、自害と見ゆるを、「なふコレ待て」と、林がなだめとどめても、薙「イヤくくくはなして殺して、情じや」と、とどむるかひも泣さけふ。侍「イヤサ是女中、死る命を忠度卿の爲に捨ふと思ふ心はないか」薙「ム、何といはしやんす、過行給ふ忠度卿の爲に、此命を捨いとは、どふしたら又お爲に成ませうな」と、いふに浪人傍をながめ小聲に成、「さすがは俊成卿の御息女、雲の上人程有て、敵を討ふといふお心が付ぬか」と、云れて姫君涙をはらひ、「ほんにそふじや。悲しいと計に心が付て、夫の修羅の妄執をはらす、敵といふは岡部の六彌太。林おじや」林「お姫様ござりませ」と、逸散にかけ行を、侍「ア、これく待たく。其様にしどけなふては、ア、敵討心元ない。岡部の六彌太忠澄といふては、武藏一國の大名なれ共、おのれ討で置うかと、女心の一念力、とくとかたまりましたかな」と、心さぐれば二人共、「ほんにそふじや」と懷劍にて、互に自身の髪を、切んとすれば押とどめ、侍「いかにも御心底見へました。未來の夫へ命を捨、又の夫は重ねぬといふ切髪、俱に付添尼法師と、さまをかへても主人の敵、討そふといふ老女の誠、ヲウ適見事々々。縁はなけれど見捨ぬは、武士の情」と矢立取出し、涕紙にさらくさつと書認め、「コレ此

ナント作藏一岡
部の宅の語に移
る
こなやつ一も前

けうがる一を
しな
十文字一八文字
を詠りていふ

ナつきりーとん
と

兄分一若衆の兄
分を念者といふ
あたらしい一初
耳
とつかは一急は
しく
末社一遊廊にて
客を取持つもの

通り敵の方への入込やう。御縁あらば重て逢ふ」と立歸れば、二人「ハアはつ」と押いたど
き、「イヤこれ申お前のお名は」と問ふ隙も、松吹風に隔られ、主従二人點頭合、立別れて
ぞ三重急ぎ行。甲「ナント作藏彌嘉内、上方からけふ奥様がござるといふが、旦那六彌太様
の奥様が、但は隠居樂人齋様の奥様かいなア」「こなやつしらなく。けふござる奥
様といふはな、旦那様が上方でこつてりと談じやつたお色だはい」甲「何、お色とは紅の
事ではないかい」作「イヤこいつけうがる兵では有。色といふはな都九條で菅原といふ
お傾城の事だはい」甲「スリヤあの十文字とやらふんであるく、國太夫節の親方殿か」
甲「チイやい。旦那六彌太様の奥様になり、けふ此内へぬめり込のさ。なんとつまい事で
はないか」甲「イヤサ夫はそふと、合點のいかないは是の隠居様、御子息の六彌太様とは、
同年ぐらゐの親子の中。おらは新參者で様子はしらないが、ありやマア何たる事だいな
ア」作「おらもすつきり合點がいかない。親御様じやといふて、あの様に大事にさつしやる
は、若は旦那の念者では有まいか。したが念者を兄分といふは聞たが、親分とはあたら
しい」と、仇口々の折からに、門前賑はふ遠見のしらせ、「上方の奥様只今是へ御入」とい
ふもとつかは奥よりも、待設の女中方、著連打連出迎へば、早昇入る乗物に、牽頭末社

しろとめかざる
—黒人らしい

喜六州云々—州
は里洞なれば喜
六は制する爲に
シツ—といふ
むつ様—六彌太
の譯名

なめた—無禮

を俱廻り、思ひ付なる出立は、しろとめかざる風情なり。中にも小横は局役、しとやかに手をつかへ、「是はく長の御道中、御機嫌宜しうおめでたいお國入。いざマアお入」と乗物の、戸を明けお手を取々に、かしづかれつゝ立出る、姿は武家をやつせ共、昔を残す詞くせ、鶯是はく皆様いかいお取持、どれがどれやらうるくしい。萬事は皆を頼むぞへ。なんと喜六州宗助州」と、いはれて喜「シツシはてこれ申」鶯いゝゑいなア、わしや聞へぬはむつ様、久しぶりの女房の顔、ヤレ菅原か久しやくと、出さんしそふな所を、昔にかはらぬおもはせぶりか。わしや逢たら一通り、きつと一番云ねばならぬ」と、長ふすわるも、日比のならばせ。傍には手に汗、「コレシツシ」にちやつと居直り、鶯ほんにマアわしとした事が、始めての付合になめたらしい。チ、笑止」と袖覆ふさへ里めかし。小横「何と皆見やつたか、都女中はわさく」と、かぶき芝居を見る様な風俗。ほんにそれ。いや申奥様、殿様は今日叶はぬ御用で外へお出、お歸りも追付。まあ夫迄はお勞休め、お湯でもめして緩りつと、御祝言の御用意遊ばせ。皆のお衆は勝手に休息、いざさせ給へ」と皆々は、奥と口とに立別れ、打連てこそ入にけれ。程なく又もしらせの侍、「奥方様都より只今お入」と、詞の下より、嬖局、「こりやまあどふじや。どちらぞが

川竹―遊女
花車―遺手、遺
手は赤前垂を著
るより續けたり

別れにし云々―
死せし忠度を戀
ふ意
夕の雲云々―楚
の襄王が巫山雲
雨の夢の故事

狐ではないか。是非一人は紛れ者に極つた。どふやら奥にござるのが、チ、笑止の詞付、尻聲がなかつた。化されまいぞ合點か」と、睫をぬらす其隙に、日がさにつるゝ八もんじ、梅や櫻と見ゆれ共、散りてかひなき袖の露、やつせばやつす菊の前。昔は雲井の月にめで、けふは浮身を川竹の、流れに染るはで衣装。林は花車に身をかへて、赤前垂の紅も、顔の紅葉と照添て、餘所目を包む里詞、林「コレ申 太夫さん、爰が日比逢たがらんしたむつ様のおやしき。けふといふけふ天下晴ての奥様遠慮はない。必氣をしつかりと持しやんせ」と、いへどしほれし菊の前、我のみ世をばかこち顔、「別れにし其日計は廻りきて、又も返らぬ人ぞ戀しきと、上東門院の女房伊勢大輔の歌の心、夕の雲朝の雨と誓ひしことも楚王の夢、はかないは浮世、あぢきなの此身の上」と計にて、思はず結ぶ露時雨、林「ア、これく、夫はまあ何いわしやんす、あられもない事ばかり。エ、聞へた、昔の勤を隠そふと、堂上めかして、チ、虚言。都九條のお傾城菅原といふ事は、何ほ隠しても知て有。皆の女中は都勝り、粹のうはもりナア皆様、宜しう萬事お指圖」といふ間あらせす先走り、「旦那お歸りく」と、しらせに、妓口を揃へ、「サアもふ樂じや。一時に二人來た姫御の正體、本阿彌様にかけたらば、つるくら紛れにさぐつても、はいり

付た門口は、心覺へが有そな物」と、云捨て奥へ入跡へ、岡部の六彌太忠澄は、威勢も
 高き廣書院、しづく歸る廊下口、二人は見るより「ヤアあのこなたは、きのふ逢た深編
 笠の侍。いか様日外見しり有る、六彌太殿に似た顔と、思へどかはりし形恰好。ふしぎ
 に有たが其こなたが」六「いかにも横目の忍姿岡部の六彌太忠澄さ」菊「スリヤ願ふ所の
 夫の敵」と、手早く懷劍突かくる、二人の利腕しつかとおさへ、六「コリヤサく、まだ祝
 言もせぬ中から、格氣いさかひ早い。ナ合點か。此六彌太を付ねらふ、ナ付つ廻し
 つ戀慕ふ、其女房を合點で、呼迎へたは互の心底。年月疎遠に打過た、恨も有ふ憎から
 ふ、道理じや。ハテサ歌憎いくは可愛の裏よ。ハ、ハ、嬉しい。したが走を妾とい
 ひ娶を妻といふ、婚儀は人の大禮なれば、表立て祝言を、取結ぶは暮六つ。寢物語は浮
 世の夢。老女一間に伴ひ、用意をしめされ。身は大切な親人へ、今日の御機嫌伺ひ。マ
 ア夫迄はおいきやれさ」二人スリヤ暮六つ限りに婚禮の用意。忠澄殿。忠澄様。待てお
 りますぞへ」忠「ハテ扱せく事はないおいきやれ」と、詞の目釘打しめし、心隔の襖と
 襖、引別れてぞ三重入にける。さを鹿の、夫待兼て菅原は、そろく出る奥の間は、音
 も耳なれし里の歌、歌誠なれ共、あはねばうそよ、しんき心のやるせなや。「アノ胡弓三

とけしなく待
還にて

しやーそれしや
の路か

和歌三神一住吉
玉津島入麿の三
神

鮠―生物の血を
吸取る故
氣疎い―いやな

味せんは、御隠居様をいさめの御酒宴、ほんに歌のふしでは有。何ほ六彌太様の心はかは
るまいと思ふて居れど、三とせ隔て逢迄は、わしやどふも心が濟ぬ、逢たらどふしてか
ふして」と、案じも同じ菊の前、暮六つ迄もとけしなく、だまして討ん下心、忍び出たる
背と背、べつたり行合、「ア、こは」と、飛のく二人が顔じろく、菊「ハ、おまへはどな
たじやへ」萱「ハイわしは私じやが、マアそふおつしやるおまへはどなたじやへ」と、問
かけられて菊の前、「わしは、アノ慮外ながら、岡部の六彌太が奥様、都九條の菅原とい
ふしやの果でござんす」と、聞て菅原、「ホ、こりやおかしい。其菅原といふ傾城の、
御本家様をとらまへて、菅原といふしやの果じやとは、テモきつい間違ひやう。ム、嬬
衆か但又家中衆のお内儀様か。近付に成ましよ」と、上から出れば菊の前、「イヤく和
歌三神を證據、其菅原はわしじやわいな」萱「イヤおれが事じや」菊「イヤくわしじやわ
しじやく」と、聞て菅原あきれ果、「コリヤまあ何のこつちや。ム、ウ聞へた、扱は大事
の夫を吸取ふとする、鮠の様な女じやな。そしてまああた憎てらしい、あの美しい器量
はいの。サアくこりやもふ氣疎い。かんしやくが發つてきたはいな」二人「ム、よいよ
い。互にいふては水かけ論、深い浅いは夫が證據、たとへ年號は變る共、いかなくかは

はうろく頭巾
大黒天の被る頭巾

こふけー豪家に
て威勢

らぬ中。直々逢て吟味する。サ、おじやいかふ」と、立上れば、「ヤア／＼兩人待々」と
 聲かけて、ゆるぎ出たる此家の隠居、名も身の上も樂人齋、ほうろく頭巾大袍、左右に
 胡弓と三味せんを提、二人を尻目につけて、「ヤア紛はしき二人の菅原詮議の道具は此胡
 弓と三味せん。誠や傾城白拍子は、酒色に流れて淫聲を顯はす。二人の内どちらでも、
 誠傾城菅原に極まれれば、祝言さするは此親のこふけ。サア引け聞ふ」と襷の上、脇息
 取て打もたれ、「サア兩人、ハテしづとい、何隙どる」と手詰の場所。六「ヤア／＼親人、音
 曲お聞なさるゝに及ばず、其一人の紛者引出して、お目につけん」と立出る、六彌太を
 取て引よせ、樂「ヤア小ざかしい。親をもどく不孝者、見るも中／＼いま／＼しい」と
 脇息取てつどけ打。「なふコレ待て」と菅原と、俱に驚く菊の前、わなよきふるへば六彌
 太が、衿がみ取て引よする、ともに若木の親子の中、様子有けに見へにける。樂「サア／＼
 弾け女。ヤアきよろ／＼と何うちつく」とせんかたも、涙かた手に連引の、心々やかは
 るらん。歌身をすつる、里あればこそ浮む瀬の、あるを頼にうき勤。樂「ヤアもふよい、ひ
 くな、詮議は濟だ。九條の町の傾城菅原といふは、此女に極つた」と、思ひがけなき菊
 の前、「アイ／＼おまへはきつゝい調子聞。とても事の事に祝言を」と、いそ／＼すれば六「氣

づかひすな、モウ暮六つに程も有まい。勝手へ入て用意々々」菊「ア、忝いコレこちの人、必詞違へまい」と、敵討ふの氣ははり弓。「ア、これく」と菅原が、とむるもよそに走入。やらじとかけ入る菅原を、引とどめて樂人齋「我上方に有し時、見ぬ戀風にあこがれし、九條の里の傾城菅原、けふといふけふめぐり逢も不思議の因縁。忝六彌太、此女に暇をやれ」六「エ、それは」鷲「夫とは得心せぬな。サアくくどうじゃ」と、せり詰られて返答も、あきれ果てぞ見へにける。鷲「イヤこれそこな若い親父様、こなさんはくくあちらをほんの菅原じやといふて、今又私を菅原じやの、イヤ見ぬ戀に風ひいたのと、がつくりそつくりな物の云やう。若又六彌太様がさらんしたら、どふしやうと思はんす」鷲「チ、女房にして抱てねる」鷲「エ、」鷲「ム、」、今奥へやつたはな、ありや、さつまのかみだりの薩摩守忠度が云かはした菊の前さ。忝六彌太は夫の敵、祝言といふは偽り、女に涙もろい忝のうんつく。敵を討れるアリヤ約束じやはよい」と、聞より菅原狂氣の如く、「そんならあの今の女中様に、命をやつて此わしとは、どの命で添はしやんす。海山こへてはるばると、添ひにきた女房の、身にも成て見たがよい。餘の事に涙さへ、胸に冰て出ぬはいな」と、たよく聲のいひがひなき。鷲「ヤアとても命のねぐさつた六彌太、連添てもいん

きりくはま
子は三界の首か
せー諺にて子の
爲に親は自由にならぬ意

はでてんごう
ばかな冗戯
眞のあてー誠の
あて身

面ばれー體面を
持つため
方量ー方圖

まに若後家。ゑに歎をかけるも不便。コリヤ子より達者な此親父、思ひこんだる戀の意地、おうといはふがいふまいが、けふの今から身が女房。おうといへやいく、親孝行じや。ヤイ憚、きりく暇の狀をかけ。子は三界の首かせとは、今身の上にしられた」と、傍若無人の横車、持餘してぞ見へにける。菅原涙打はらひ、「ほんにそふじや。よその女に見かへる夫、心中立るは大きな愚痴」樂、そんならおれに隨ふか」萱、チ、隨ふ段か帶といて、ねて花やろ」と立寄るふり、そばなる刀、抜打に、切てかゝるをかいくどり、「ヤアこりやちよございな、ほでてんごう」と跳飛せば、透間なく又切かくるを、眞のあて、うんと計に倒れば、六彌太透さず取て投、注連を飭し箱よりも、陣笠鎧引出せば、見るよりハット樂人齋、ひるむ所をはつたとねめ付、陣笠鎧兩手にさよけ、忠なんと親人、此二色の笠鎧、覺が有ふ見しりつらん。誠や故人の詞にも、用ひられる時は鼠も虎となるといふは、まだも能有人の身の上。こな天命しらすの匹夫め。今改ていふにはあらねど、女房菅原が六彌太をふがひなしと思はん面ばれ。もとこなやつは六彌太が旗持の雜兵、所存有て此ごとく、親と敬ひ尊敬すれば、方量もなき兼ての我儘。あまつさへ我女房に無體の戀慕。無法非道の人畜め。わるく動かば五體を八つ裂。サアびつとで

機嫌はけ長く
たてかけといふ
中そりあり（我
衣）

も動いて見よ」と、鎧をもつてさんぐくに、折れよ碎と打なやせば、頭巾はぬけて撥鬚
奴興の醒たる風情なり。恥を恥共思はぬ強惡、「ヤイこな六彌太の恩しらすめ。今鎌倉
で岡部の六彌太といはれて、榮花に暮すは、誰様が蔭じやぞやい。わりやおめく」と忠
度に組しかれたを忘れたな。其時に此郎等、右の腕を切落さずば、コリヤ此首は有まい
がな。いはゞ手柄は此奴。よいは、是からばれ次手、鎌倉殿の御所へいて、六彌太が高名
は、此鼻がさしました、と注進の上武藏一國、我手に入るが意趣晴し。待てをれべら坊
め」と、かけ行く所を菅原が、「そふはさせぬ」と切付る。六彌太は只たばこの烟、さは
がぬ太五平、菅原を膝の下にしつかとねぢ付、「コリヤまづ此如く薩摩守忠度が、あの六
彌太を下に組敷、首をかよんとせし所を」一間をかけ出菊の前、「かう切たか」と太五平
が、右の腕を打落し、菊、敵といふは六彌太殿と思ひの外、誠の敵は此太五平。夫の恨を
とどめの刀、おもひしれ」と立寄給へば、太ヤアこれ今暫く待てたべ」と、起上る太五平は、
手負に屈せぬ強氣の面色。「ア、忝いゝ姫君。此奴が念がとどいて、よう切て下さり
ましたの。コリヤ妹初霜」と、聞て恠り菅原は、「ムウ初霜といふは私が稚名。夫を知
たこな様は」と、問れて太五平涙をうかめ、「ヲ、かう計いふては合點の行ぬは尤。おり

いぶせき—窮屈
な

念なう—さうさ
なく

や稚い時に別れた、わが兄の兵之介じやはやいと、聞にいよくふしぎはれず、寧ム
 ム其又現在兄様が、此妹に惚たといひ、そして何じや姫君様、よう切て下さつたと、
 覺悟の様子は合點がいかにね」太チ、疑はしいは尤。今さら語るも涙の種、姫君様も聞て
 たべ。元我親は」六チ、其譯は此六彌太が推量に違はず、汝が親は平家の太將、三位中
 將重衡の家臣、臆病者の名を取し、後藤兵衛守長で有ふがな」と、聞て太五平「ハ、は
 つ」と仰天、「ア扱々驚入たる忠澄殿の明察。草にも心匿露の、やどり定めぬ我生立、
 御存しられし様子はいかに」六チ、それ誰か有、繩付ひけ」と詞の下、思ひがけなき乳
 母の林、見るめいぶせき繩目の恥、妹は見るより「ノウ母様がおなつかしや」と走寄り、
 「此ア繩目は何故」と、姫も手負も驚けば、大「イヤ始終の様子一通六彌太が云聞さん、
 菊の前もお聞あれ。さいつ比都出陣の折から、御身の父上俊成卿より密の内意、和
 歌の弟子たる忠度は、一方ならぬ縁も有ば、くれぐと頼むと餘義なき仰。所に源平生
 田の合戦、向ふ敵と渡合、互に馬を乗はなし、念なう下に組敷しが、面さし見れば見知
 有忠度卿、扱こそ俊成卿の御頼みは爰ぞ、と心得、助んと思ひながらも名ある敵、い
 かどはせんとためらふ中、力勝りの忠度卿に、はね返されて此六彌太、組しかれしを下

おこがましうー
生意氣にも

さみー蔑にする

そびき入れー誘
ひ入れ

わんばくーあが
き猿

郎の汝、思ひがけなく後より、右の腕を切し故、いたはるかひも涙ながら、御首討ておこがましう、武門の數に列る中、合點のいかぬは汝が胸中。忠度卿に打かけしは、紛ひもなき源氏方、夫には違ひ詞のはしぐ、源氏をさみする面魂、ハテ心得ずと思ふより、兼て見置し此頭巾、裏に正しく書付しは、三位中將重衡の戒名、朝夕いたどく心の底、扱こそしれ者手ばなされずと、思ひ付たる恩ごかし、親と敬ひ是迄に、心を付しは其方が、謀叛を押ゆる情の獄屋。今日はへ兩人を、そびき入しは汝が素性、責さいなんで尋んため。所に思はず其方が、己と名のるはこりや下郎の猿智恵。なんと思ひしつたか」と、始終を聞て太五平は、肌骨を貫く吐息の炎。母は涙の顔を上、「後藤兵衛守長殿に連添有しは二十年前、七つと三つのあの子供を、付て離別の憂難義、妹が乳にて漸と、俊成卿へ乳母奉公。妹は傾城あの兄は、有にあられぬわんばく太郎。侍の子といふたらば、猶我儘が募らふかと、勘當して置く其中に、いつぞや太五平我内へ、刀を盗みにはいつたを、見付て聞け軍に出ると、いふこそ幸ひ高名して、侍の名を顯はせよと、家の系圖を折紙と、刀に添てやつたるが、却つて害になつたよな」太「チ、いかにも貰ひし其系圖、開いて見れば我親は、後藤兵衛守長。ア、恥しからぬ平家の侍、おのれ何

不覺——不心得

しなしたりし
くじつたり

けどる——様子を
悟らる

でも源氏に紛れ込、雑兵と成り裏切し、親守長に對面せんと、いさみに勇む一の谷、後藤兵衛守長は、主君中將重衡を、ふり捨て逃たりし臆病者、畜生武士と軍中の取ざたなむ三寶我親は、不覺の惡名取しかと、胸に磐石五臓に石火矢、なんほう無念に有けるが、よし／＼源氏の侍の首取て高名し、親子の恥を雪がんと、心を碎く生田の戰場、夕暮空のはのぐらく、浪打際にひつ組で、上になつたは慥に貴殿、シヤ六彌太殿と思ふより、右の腕を只一討。よく／＼見ればこはいかに、薩摩守忠度卿。ア、しなしたりな。よし其場にて腹切んとは思ひしかど、イヤ／＼忠義を顯はす時節もと、味方顔にて御首を、やみ／＼こなたに討したる、無念といふも我誤り。かくけどられし上からは、我一分の我を立ても、逆も詮なき平家の御運。せめてはいらざる此命、姫君に討れんと、殺されに出た手柄咄し。エ、おでかしなされた姫君様。忠度卿の右の腕、切た刀で切るも、此世の因果をはたす道理。思へば／＼不運なる、我身の上」と悔泣。「扱は」と驚く人々の、中に妹が傍に有、刀取上涙ながら、顔見ぬ父の筐かと、思へばいとど胸せまり、くどき歎ば太五平は、妹が持たる拔刀、手を持ち添てめての脇腹、ぐつとつとこむ覺悟の最期。「こは／＼いかに何故」と、親子は心取亂せば、忝ア、さはぐまい／＼」と

はし折かどみー
縁に繋がる

かくすけー奴の
通名

勘當を―下に許
し下されの句を
略す

押しづめ、「平家方の此兄を、切たは妹が源氏へ忠義。此一刀の手柄にめんじ、申六彌太殿、必見捨てやつて下さりますな。たつたふたりののはし折かどみ、わたしやあいつがふびんにござる。成人して名は菅原と聞たを便り、上方へ上つた次手に九條の町、なつかしさに逢うと思へど、身はかくすけのさびた形、全盛かざる妹が恥と、三筋の町の格子の先、よいよ鹿子様、ヨウつりひ様と、ぞめきに紛れて名をとへば、客に揚られ柏やの、二階の障子に影法師、三味せん取てなけぶしの、聲を聞たが、コリヤ兄弟の名乗。其時音色も聲もありくと、おりや耳の底にしみ付て、今に忘れぬ兄弟のよしみ。それ故最前三味せんで、慥に妹と見極めても、平家に縁有るそちなれば、よもや添ては下さるまじと、現在妹に、女房になれの惚たのと、心に思はぬ悪黨も、かくはからはん心の内、推量してたべ母者人。エ、ついに一日孝行せず、先だつ不孝赦して下され。せめて未來は、勘當々々を」と跡ひ兼るいぢらしさ。母は取分妹も、正體涙に菊の前、「我とても恩と情にからまされ、敵さへなき身の上は、兎にもかくにも我夫の、甲斐なき御運」と計にて、見合す四人がとも涙、前後ふかくに見へけるが、何思ひけん六彌太は、林がなはめ引ほどき、「太五平が白狀にて、家名知れば詮議に及ばず。女ながらも敵の餘類。

ヤア／＼後藤兵衛が妻娘、此家に叶はぬ早出て行け」と、聞て菅原今更に、「そりや餘り
 じやどうよくじや」と、いふをも聞ず姫と林を引立、庭へ突出し、六「女房」去た。ハテこ
 りやナ、やり手の付た傾城菅原、敵の娘と聞ては添れぬ。もとの廓へ流し者、付添ある
 くはやり手の役目」初「スリヤ此わしは」六「チ、サ兄弟の縁が切ればコリヤ女房。一世
 の別れの名残を惜め」と情の詞。「ハア盡せぬ御恩」と伏しをがむ。折から柏子木家中の
 夜廻り。六彌太邊に心付、「コリヤ／＼そこな傾城やり手、古郷へ歸る錦の袋、ソレ持て
 行」と投出す。一人は立寄り取上見れば、行暮て木の下影を宿とせば、チ、其下の句は、
 花や今宵のあるじならまし。忠度卿のさいごの一首、菊「ヤア扱は筐か。ハアはつ」と、歎
 き給へば林も俱に、ありし昔を悔泣。「ハテ扱これ此六彌太が寸志の情。源氏は今を盛の
 日の出、平家は暮行く、アレ約束の暮六つ。夜に入ば敵味方のあいろが見へぬ。ソレ早
 ふく」ハアお志忘れはせじもふおさらば」と立上れば、手負は今ぞ此世の名残、花
 や今宵のちり櫻。妹は一人親兄の、別れを胸に八重櫻。姫は筐の言の葉に、むすぶ心のい
 と櫻。あとに老木のうばざくら。涙の雨や小夜あらし、生死不定は世の中の、ふだん櫻
 といさめても、つきぬなごりの山ざくら、ちり／＼にこそわかれゆく。

あいろー黒白

八重櫻ーかさね
る意をかく
老木ー林をさす

第五

魏王は云々―府に魏王遺楚美人、夫人鄭哀愛之甚於王、鄭知王以己爲不妬、因謂美人曰、王惡子之鼻見王必掩之、美人從之、王謂鄭曰、美人見我必掩鼻何也、對曰、似惡聞王之臭、王則其鼻。

魏王は鄭哀が讒によつて、美人の鼻を削しむるとかや。征夷將軍賴朝公、相從ふ大小名、岡部の六彌太忠澄を初め、威義を正して相詰る。賴朝御簾に向はせ給ひ、「此度の戦ひに、平家の一門西海の浪の泡と消失し事、全く賴朝が武略にあらず。是皆神明佛陀の御加護と存奉る」と、卑下の詞も奥床し。平の時忠笏取直し、「西國にて源九郎義經、平家と悉く討亡し、其虛に乗て兄賴朝も討取、一天下を併吞せんと、某をたばかり京の君を娶、神璽内侍所を奪ひ、直に鎌倉へ攻入ん由、急ぎ告げ知らせん爲來つたり。屹度征伐然るべし」と、賢人顔の佞人は、いはねど夫と知れける。六彌太聞兼つと出、「何と云る」と時忠卿。義經公に限り、左様な御所存少もなく、腰越迄御出有しを平山が讒言故、鎌倉へも御入なく、直に御切腹召るべきを、舊臣の輩押とどめ、我君への取なしは、六彌太が披露承る。夫に御邊が何しつて。扣へ召れ」ときめ付れば、時忠も反打かけ、互に色立見へければ、賴朝「しばし」とせし給ひ、「やをれ六彌太、佞人原が讒言を用ひべき我ならず。義經腰越に屯するは、鎌倉をくつがへさんとの手配ならん。さすれば弟

十握の御劔―神の寶劍

辻容赦はならず、討取て我存念を晴すべし」と、氣色かはつて宣へば、時忠は思ふつほ、心の内に含む笑。六彌太猶もすゝみ寄り、「然らば義經公、誠の謀叛にもなされよ、三種の神器の内、神璽内侍所、此二品は先達て、義經公の御手に有、帝都を守護しましませば、すなはちくわんぐん則官軍。それに敵對弓引給ふは朝敵も同前。武備盛なる時は返つて其身を害すと申。此義いかゞ」と言上すれば、賴朝騒ず、「チ、其義は某工夫をこらし置たる事あんなれ其子細は、安徳天皇十握の御劔を携入水有しと聞より早く、都八條大納言兼房卿と申合せ、老松若松といふ海士子供を浪間に入て海底を捜させけるに、龍宮城へ奪ひたる十握の御劔を取返し、兼房卿に指上しを、御所持有て御下向、賴朝拜諾仕る。此桐が谷へ御新殿をしつらひ、將軍の宮と傳き、則此宮より綸旨を乞受け、義經との戦は、官軍と官軍のはれ勝負、幸の諸大名一同の出仕。それく」との詞の中「はつ」と領掌謹で、御劔の筥を携て、御簾間近く持出る。賴朝公恭く、寶劔を取かざり、天顔の恐れ有と玉座の御すし、半頃迄巻上れば、各一度に尊敬する。時忠大口明てからく」と笑ひ、「賴朝は、智仁兼備の大將と、聞しに違ひし愚將よな。スリヤ誰によらず寶劔を所持したる者あらば、將軍の宮と敬ふか」と、つとと立寄り寶劔取て打折々々、白洲へかつばと

敗亡―あつけに
取られる
騷れそ―さわぐ
な

棟梁の臣―天子
輔佐の臣
もつてうじられ
―尊敬され

横紙破り―横道
者

投付れば、「是は」と皆々仰天敗亡。時忠は緩々と座に直り、「ヤア騷れそ頼朝。あの寶劍は紛れもなき眞赤な贋物」頼「シテ、其贋物といふ慥な證據が」時「チ、證據なくて折るべきや。寶劍を所持したる者、當宮に立つと有故、云聞するよつく聞け。都にて義經某を招き、何とぞ三種の神寶奪ひ取てくれよと有、密の頼みのつぴきならず、智略を以て奪取しかど、吞込ぬ義經が心服ゆへ、先二色は渡したれ共、御寶隨一の寶劍は某が、肌身も離さず屹度所持せり。疑はしくば是見よ」と、懷中より取出せば、邊もかどやく十握の御劍。頼朝公を初として、列座の人々一時に、あつと恐れをなしにけり。頼朝重て宣ふは、「今より時忠卿を將軍の宮と仰奉らん。ヤア、諸大名萬歳を唱へられよ」と、棟梁の臣の一言に、もつてうじられ勝に乗り、時「此上は贋宮を引出し面縛させん」と、ずつと立寄り御簾引ちぎればコハいかに、思ひがけなき判官義經、寶劍奪取もんどり打せ、足下にぐつと踏付給ひ、「ヤア天命しらすの大納言。安徳天皇寶劍をいだき入水有しと偽りしを、合點行すと察するに御邊が奪ひ所持する由、兄頼朝と云合せ、様々心を盡したは、此寶劍を奪ひ返さん謀。サア尋常に繩かゝられよ」と、仁心深き義經の、詞にひるまぬ横紙破り、無念の顔色はがみをなし、「エ、たばかられし奇怪千萬。平山と心を合せ、

汝等兄弟同士打させ、一天下を一呑、と巧し事も水の泡。よし／＼此上は絶體絶命、命限りに切拔んと、太刀ひん抜て切付る。引ばづして勾欄より、白洲へどうど蹴落し給へば、六彌太すかさず飛びかより、高手小手にいましむる。頼朝心地よけに打守らせ給ひ、「國家をさはがす大罪人、刑罰急度糺すべし。それはからへ」と宣ふ所へ、土砂踏散しあはたどしく、しらせの早打かけ來り、「扱も平山の武者所、謀叛の工顯れし故、扇が谷に野陣を構へ、此御殿を追取卷き、攻入んとの催故、早速御注進仕る」と、大息ついで訴ふれば、義經につこと打笑給ひ、「ヤア／＼六彌太、扇が谷平山が陣所に馳向ひ、有無をいはず討取るべし」と仰は重き兩將の、詞につると岡部の六彌太、「いざ打立や」「尤」と、御前に竝居る隨兵共、我先がけん／＼と、勝色見せたるやへ梅の花芳しき弓取の、聲も清しき軍立、扇が谷へと三重急ぎけり。平山の武者所、頼朝兄弟誅罰せんと、扇が谷に陣屋をしつらひ、士卒を隨へ控へる。かゝる所へ岡部の六彌太、軍兵引具し眞先に大音上、「ヤア平山の武者所、汝が悪事顯れし故、此所に陣所を構へ御兄弟へ敵せんよし。頼朝の仰を蒙る、岡部の六彌太向ふたり。手に立武士はおおりあへ」と、高らかに呼はつたり。かくと聞より平山末重陣屋より踴出、「ヤア／＼岡部の六彌太、此方

さしつたりーオ
イ合點
獅子忿迅云々ー
獅子虎のあれた
る如く
二人が命ー醒井
馬場の命

尾筒ー馬の尾の
つづもと

鳩胸ー胸部の高
くつき出たるも

より馳向ひ、討取んと思ひしに、遙々とよううせた。某が手をおろすに及ばず、ソレ
兩人、物ないはせそ討取」と下知しながらに引かへす。「畏つた」と醒井番場、無二無
三に討てかゝる。「さしつたり」と渡合、持て開いて眞向かざし、矢き刃の電光石火、獅
子忿迅虎亂入、馬手は堅割弓手は胴切、二人が命は草葉の露。「ソレ遁すな」と軍兵共、
おめいてかゝるをこと共せず、向ふやつばら嫌ひなく。大けさ小けさ車切、片端切立まく
り立、追立くめつた切。平「こりやたまらぬ」とばらくく。跡をしたふて忠澄が、
遁さじやらじと追て行。さしもの平山途を失ひ、馬のはなを立かへて、落行んとせし所
へ、岡部六彌太取てかへし、やらじと尾筒をしつかと取、「コリヤくくく」と引戻す。
平「シヤ邪魔ひろぐな毛二才め。そこ立去らずば蹄にかけ、胴腹に風間を明ん。爰を放
せ」と、燈の鳩胸、あをり打立鞭打くれ、「ハイくくく」と乗出せば、思「どつこいどこへ」
と引留る。追立引留はみ轡、音はちりょんからころり。駒の嘶土煙。六彌太いらつて
突放せば、馬は前立頭轉倒。ころりと落つる平山を、起しも立ず取て引伏せ、首引抜かんと
せし所へ、源義經公平大納言を引立させ、しづくと立出給ひ、義「ホウ手柄々々。我々
兄弟へ敵せんと工む平山、縛首打刑罰糺せよ」と、仰に「はつ」と六彌太忠澄、手早に取縄

巧のもの―巧は
功か

しつかとかけ、水もたまらず首打落す。かゝる所へ熊谷入道飛鳥のごとくかけ來り、義經公に打向ひ、「東へ下る道すがら、始終の様子承る。時忠卿は大納言の位有ば、私には成難し。蓮生法師が出家の役、都へ連れ行禁廷の御差圖を蒙らん。何とぞ愚僧に御預下されかし」と願へば、義經打うなづかせ給ひ、「チ、神妙々々。高位の身なればうかつには殺されず。いかにも和僧が願ひに任せ、時忠を預くべし。直に都へ連上、院の廳の御沙汰にかけ、兎もかくも計ふべし」と、仰に「はつ」と蓮生法師、時忠を預り申、莞爾と笑ひてすみたる一首の歌、「極樂にも巧の者とや思ふらん、西に向ひて後見せねば」と詠歌を残し、暇乞して歸りけり。實末の代にいたりても、敵に後を見せぬとは、此ことわりとしられたり。義經御喜悅限りなく、「祿を貪る佞人原を亡せし此上は、三種の神器を守奉り、兄弟打連都へ登り、此趣を奏聞せん。いさめやかたぐ打立」と、御詔に任する岡部の六彌太、「御立ざふ」と呼はれば、御供奉の大小名、綺羅を飾て歸洛有朝敵亡の凱歌の聲、太刀は鞘、弓は袋と納りて、千代榮へぬる源氏、四海太平豊なる、國こそ久しかりけらし。

出雲半二 淨瑠璃傑作集終
海音宗輔